
それはとてもきれいな空で・・・

ルシアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはとてもきれいな空で・・・

【Nコード】

N3988S

【作者名】

ルシアン

【あらすじ】

気づかないうちに死に、世界を超えて憑依してしまった主人公。
憑依先の世界はガンダムSEED。しかもアズラエル！
……どうしよう？

それはとてもきれいな夢で（前書き）

初投稿です。生暖かい目で見守ってください。

ガンダムなんだ!?

それはとても困った問題で

目を開けるとそこは豪華な部屋でした。

……なんで？

いやいや、俺飛行機に乗ってたし。

そりゃまあ貧乏ではなかったけどここまでリッチな感じの部屋にいたことないし。

っていうかあの鏡に映ってる西洋系の少年誰！？

俺じゃないよ！考えるまでもないけど。

でも消去法的には俺しかこの部屋にいないし：

：いやいや、あれは新型のテレビに違いない。

そうか、飛行機に乗っている間にここまで斬新なデザインのテレビができたのか。

んでもってこの短期間に人類は宇宙に住めるようになり、テレビにはアニメで見たようなおっちゃんが映っていると：

「私たちはプラントに住むコーディネイターの意見を民主的に意思表明し、正当なる権利を確保するためにこの黄道同盟を設立した！」

ガンダムでああ！

しかもSEED！！

なんで！？ってか俺誰？

コンコンッ

「ムルタ様、少々よろしいでしょうか？」

アズラエルかよ！！

それはとても困った問題で（後書き）

次からは長くなる…はず

それはとても虚しい現実で

「アズラエル様、新エネルギー計画についての報告です。」

やあ諸君、アズラエルだ。唐突すぎてびっくりだろうがしょうがない。僕もびっくりだ。

というのもどうも僕は「憑依」なるものをしてしまったらしい。まあ姿かたちが変わって前世の知識があるだけだからもしかしたら「転生」なのかもしれないんだけど：

そんなことより重要なことがあってね、ここ、ガンダムS E E Dの世界なんだ。

で、さらに言うと僕の名前はムルタ・アズラエル。アズラエル財閥の現会長。

いやあ、なかなかすごいよね。会長業やってるとき、口調も変わるし一人称なんて「俺」から「僕」だよ。

：まあ英語でしゃべってるからどっちにしても「I」なんだけどね。

で、僕はあんまりS E E Dを知らないからよく分かんないんだけどたしか

アズラエルってやられ役だよな。

嫌だよ死ぬのなんてというわけで今頑張ってるわけよ。「たしか地球連合ってしばらく核が使えなくなってたよな」っていう少ない知識をもとにエネルギー関連にもアズラエル財閥は手を出してるし。政治家には「ウランの産出国はユーラシアやオセアニアに固まっているから原子力発電に依存するのはマズイ」って吹聴して回ってさ、今月に発電所を作ってるんだ。月の近くに鏡をいっぱい置いて太陽光を集束して、月で太陽光発電したのを赤外線に変えて地球に送ってエネルギー源とするっていう方法。

…前世の科学チャネルでやってた方法がまさか実現できるとは…

あ、後コーディネーターってホントやばいわ。才能にあぐらかいてるやつはどうってことないけど、頑張った時の成長率とか、能力の上限が桁外れ。ユダヤ人どころじゃないわ。

だから、原作通り環境保護団体「ブルーコスモス」は反コーディネーターで固めた。ってか、コーディネーターのせいで職を追われた人とか、コーディネーターの犯罪者のせいで被害を受けた人に対する救済措置にしたんだ。

…政府が対応できてないんだよね。

しかもせっかく世界中の財閥とか大企業が出資して作ったプラントを勝手に自分たちの物の様に言ってるし。

こうなったらこっちだって武力鎮圧できるようにしとかないと…

「兵器開発局に宇宙戦闘に向けた新型戦艦の開発を急ぐように伝えといてくれ。」

「わかりました。ところで、わが社の主力でもある宇宙空間作業用ロボット産業をどうしましょうか。エネルギー系統にシェアをかなり拡大したおかげで、赤字の補てんはできそうですが、コーディネーター系の企業に押されまくってます。」

ガンダム世界の主役は確かにロボットだ。だけど、

「…これでは撤退するしかないだろ。しょうがない、警備・介護用ロボットを除いて撤退だ。宇宙航空機産業のシェア拡大を目指そう。」

「無難ですな。そのように役員には伝えておきます。」

ま、現実にはこんなもんだ。

それはとても不用意な選択で

「アズラエル様、人種被害対策課からの報告が上がってきておりますが…」

「わかった、そこに置いておいてくれ。」

CE57年、つまりは今から3年前にアズラエル財閥の支援によって作られた「ブルーコスモス」はコーディネイターの出現に伴って発生した失業者や犯罪被害者を支援するために作られ、当時は無策な各国政府に代わって弱者を助けているとしてマスコミに報道され、アズラエル財閥をイメージアップさせていた。しかし、コーディネイターへの恨みや憎しみを培養する組織にもなってしまっており、ブルーコスモスの保護やサービスを受けた政治家や投資家、企業が反コーディネイターになってしまうのはまだかわいほうで、一部の人間はテロリストにまでなってしまうていた。さらに治安の悪い地域では「ブルーコスモス」を名乗る反社会団体（つまりはテログループやマフィア）まで現れており、「ブルーコスモス」に対して何らかの制御を施さなければならなかった。そこで最近アズラエル財閥は「ブルーコスモス」を吸収して、新設した人種被害対策課のもとに置いたうえで、従来通りの活動に加えてプラントや親コーディネイター国家への諜報業務を行わせていた。

「黄道同盟の勢力拡大…。中心人物はシーゲル・クラインとパトリック・ザラ：か。」

プラント開発理事国によるプラント評議会に対する監督は残念ながら甘いと言えず、最近の報告書には「黄道同盟をはじめとするプラント独立派の活動は極めて低調になりつつある」とまで書かれていた。

また、プラント開発に携わった国家と携われなかった国家との間の経済格差も深刻になり始めており、これらの持たざる国の中にはプ

ラントが独立を図った暁には新プラント国になり、貿易による利益を独占しようとする国家も現れてきていた。

そんな中われらが大西洋連邦は国防産業連合に対して大量の兵器を発注したのだが、その兵器の大半が大気圏内用兵器であったこと、さらにはブルーコスモス系の政治家や軍人からの情報から推測するに、どうも政府はプラント独立戦争よりも第4次世界大戦のほうが先に起こると考えているらしい。

先日開発したMA（モビル・アーマー）、メビウス・ゼロの採用が無事決定した際もMAよりも大気圏内用戦闘機の開発を急ぐよう指示されてしまった。

また、1年前に完成した新型太陽光宙間発電システム（月で発電して地球にエネルギーを持ってくる前話で触れたあれ）も大西洋連邦に限って言えば電力供給量の80パーセントにまでなっているが、他の国ではせいぜいオーブと後なぜか東アジア共和国に含まれていなかった日本しか使っていない。

………Nジャマー対策になってないじゃん

それはとても不用意な選択で（後書き）

主人公はまだガンダムを開発できません。

というよりも宇宙兵器全体の開発・生産が滞ってます。

そしてなぜかいる日本。

なんとなくで生き残らせたのですが、次回、地球連合のパワーバラ
ンスをひっくり返す存在に…なる予定…

それはとても異質な存在で

日本。

それは極東に位置する国家で、ブロック化が進行した第3次世界大戦後の国家としては珍しい単一民族の小国であり、コーディネイターもほとんどいない。当然、世界中の国家が巻き込まれた第3次世界大戦において戦争も経験しており、東アジア共和国の盟主となった中華人民共和国をはねのける程度の軍事力も持っている。

しかし、日本が世界で最も異質な国家といわれているのはそのようなことではない。

日本は世界で唯一、戦闘用ロボットを軍に配備していた。

そもそも日本は非常に平和で技術力のあるお金持ちな国であり、直接戦闘を経験しなかったゆえに長年世界では受け入れがたい兵器を開発し続けてきた。技術力が足りなくてもSFチックな兵器を開発し続けた。そしてそのような開発に多額の税金を注ぎ込むことを受け入れられる国民がいた。――（世界的にはこのことが一番理解できなかった）

なぜなら国民の大半がアニメを見ていたからだ。

2015年に本格的に開発が決定された人型ロボットもその一つであり、長年開発研究され続けてきた。

金属を多用したロボットや、ウオードレスの発展系として人工筋肉が多用されたロボットなど山がちで遮蔽物の多い国だからこそ有用な兵器として、戦車に代わりに主力兵器となった。

また外交的には新興国であるオーブ連合首長国と積極的につながりを見せ、アメリカに代わるパートナーとしてやはり世界でも有数の技術力を持つ国を得た。

大戦勃発後すぐにインド、東南アジア、ロシアの三方面に戦線を作ってしまった中国では日本を制圧できなかったのだ。――（しかも中国海軍はアメリカとの戦いですり減っていた）

そういうわけでロボット開発は日本に一日どころか二日も三日も長があり、モビルスーツ開発にしてもプラント以上のシェアを日本は持っていた。

そして、持たざる国の一つでもあった東アジア共和国はこの技術を強奪せんと虎視眈々と狙っていた。

それはとても異質な存在で（後書き）

出ました日本。

まさかのロボット大国。しかもアニメの影響。

人型ロボットは日本人の夢だったのです。

で、どう連合のパワーバランスを崩すのかはまた今度。たぶんみなさん予想はできると思うのですが…。

感想募集中です。

それはとても不安定な情勢で

CE63年。

あれから3年の月日がたった。わがアズラエル財閥は資源、工業衛星におけるエネルギー関連の業界でトップのシェアを誇るようになり、国防産業理事としての権限のみならずエネルギー業界においてもかなりの権限を持つようになった。コーディネイターとナチュラル―（私はこの呼び方が好きではないのだが）との間の摩擦は一層激しくなり、ブルーコスモス派という勢力が世界中の議会や軍の中で一定の力を持つようになってしまっていた。

「アズラエル様、人種被害対策課から至急の報告が…」
「なに？」

ブルーコスモスプラント潜入班からの報告にはシーゲル・クライン及びパトリック・ザラによる独立運動が本格化したことと、彼らがモビルスーツの軍事転用を推し進めているとの報告があった。

モビルスーツ。これこそがガンダムシリーズの中でも華となっている兵器なのだが、実際に一時期アズラエル財閥で研究したところ、宇宙戦闘用にするには多大なる問題が発生することが分かっていた。そもそも、第3次世界大戦時に日本のロボットがかなりの戦果を挙げたにも関わらず世界各国の主力兵器にならなかったのには理由がある。人型ロボットはその性質上大きすぎるのだ。2足歩行で出せる最高速度には限りがあるのに対し、的として大きすぎる巨体は山やビルといった遮蔽物がない限り邪魔でしかない。その一方で険しい山や都市部の戦闘では非常に強力であった。ゆえに国土全体が遮蔽物だらけともいえ、戦車などの従来兵器が使いづらい地形を持つ日本でしか使われなかった。

一方、宇宙戦闘が主になるであろうプラントはどうか。はつきり言
って遮蔽物のない宇宙ででかい図体を持つのはバカと言える。おそ
らく、人口の少ないプラントでは宇宙軍と空軍と陸軍を別々に作る
ことができないと考えたのだろうが……。MAと同程度かそれ以下の
速度で、図体がでかいのなら現在のCIWS（近接防空火器システ
ム）を多めに取り付けた巡洋艦で対処できるかな。

それよりもそろそろプラントから軍事工場を撤退させなければ。現
在開発中の500メートル級超巨大母艦は開戦したら発注量が激増
しそうだから月の工場群も拡大しなければいけないし、今考えた防
空巡洋艦も軍に認めさせなければ……。それから乗り組むであろう土
官の育成状況もできれば確認したいし……。

とりあえず軍にはサザーランド君、議会にはアルスター君つながり
でこの報告のことも一部伝えておこう。国防産業連合の理事たちに
は私から話すとして……。あの頑固爺たちは信じてくれるかなあ……

それはとても不安定な情勢で（後書き）

原作通り、開戦するまで連合はモビルスーツを作りません。っていうか宇宙で作業用以外で人型ロボットを作るなんて普通考えないと思うんですよ。で、日本なわけですが…ま、また今度で。

それはとても頭の痛い状況で

「アズラエル様、参謀本部内でアズラエル様から頂きました情報をもとに宇宙艦隊の編成の見直しを協議いたしました。どうも上層部がいまだに仮想敵国をユーラシア連邦にしているらしく、あまり重視されませんでした。なお、以前採用されたメビウス・ゼロですがやはり適性を持つ人間は少なそうです。士官学校の視察は許可が下りました。後日日程を現地の校長と詰めてください。」

「軍でもそうだったか。こちらも議会でプラントが独自の軍を作ろうとしているといったのだが、どうも反応がにぶい。ブルーコスモス派の議員は注目してくれたが、他はユーラシアと決着をつけたいらしい。宇宙軍などよりも陸・海軍を増強しろと言われてしまったよ。」

サザーランドとアルスター議員から報告はこちらの頭を痛くしてくれた。先ほどテレビ会議で国防産業連合の理事たちと話し合ったのだが、彼らの頭の中は大西洋連邦とユーラシアとの間に起こるであろう戦争のことではいっばいらしく、真剣に取り扱ってもくれなかった。一部の奴らは拡大するであろう軍需に向けて工場をプラントにも拡大しようとまで言っていた。バカだろ。

視察で行った士官学校はここ最近で唯一癒された場所だ。いや、自分よりちょっと若い連中とこれからの軍事バランスについて語り合っただけなのだから、なにより彼らはずそ爺や利権政治家たちと違って思考が柔軟だった。視野が広いともいえる。特にあの彼女、名前はなんだっけ？ なかなかいい線をやっていた。できれば秘書にほしくらいだ。

話がずれた。まあそういうわけで宇宙軍の拡大はあまり望めそうにないのだが、気になることにどうもユーラシアの一部勢力や東アジ

ア、そして大洋州連合といった連中が非常に反大西洋連邦、親プラントといった感じになってきているらしい。アズラエル財閥の原動力の一つともいえる新型太陽光宙間発電システムによってウラン産出国の不満が高まっているということだ。最悪、プラント独立戦争の際にプラント側に立つかもしれない。そういった面では軍や政治家の言う話も分かるのだが、でもちよっとプラントに対する兵力を増やしてほしい。現在宇宙には17個艦隊存在し、オーブ艦隊の2を除くと大西洋連邦が5、ユーラシアが4、東アジアが3、日本が2、国際連合加盟国の混成艦隊が1となっている。日本がどう動くかは分からないが仮にユーラシアと東アジアが敵方につくと、大西洋連邦は劣勢となってしまう。そして軍需産業をはじめとしたかなりの工場が月に作られているのだ。もうちよっと何とかしようよ。

という会話をサザーランド中佐つながりで紹介してもらったハルバートン提督と話し合った。彼はどちらかというと反ブルーコスモスなのだが、コーディネイター憎しのみだと私のことを考えていたらしく、理路整然と愚痴りだす私にかなり驚いていた。話の分かる提督ではあったが軍内部の発言力はそこまで大きくないらしく、あまり役立つとは思えなかった。

それはとても頭の痛い状況で（後書き）

主人公は思考が大人ですので、結構人脈が作れていたりします。そして艦隊数に関しては：適当です。資料がありませんでした。ブルーコスモスに関しては環境保護団体としての前歴はなかったことになっております。あくまでアズラエル氏による失業対策というか、無能な政府に腹が立っていたとか：そんな感じですよ。感想募集中です。

それはとても予定調和な流れで

CE68年

「：であるからにして、プラントのそしてコーディネイターとしての種の繁栄をこれからもより発展させるべく尽力していく所存であります。」

今テレビでは8年ぐらい前から報告書に必ずと言っていいほど名前の載っていた人物、シーゲル・クラインによるプラント評議会議長としての初心表明演説が行われていた。今回の演説では今までの議長が必ず言ってきた「地球とプラントの共存共栄」といった言葉がなかった。おそらくこれからのプラントの行動を如実に示しているということだろう。演説内容を事前に把握したと思われる大西洋連邦国防省からは新型宇宙戦艦であるアガメムノン級に加え、3年前に何とか正式採用させた500メートル級超大型母艦のユグドラシル級、そしてMAのメビウスとメビウス・ゼロの発注が相次いでいた。また、宇宙軍の規模がなかなか拡大されず最悪開戦時にパイロットが足りなくなるだろうと予測した私の命令で開発させた無人MA「ヴァルキュリア」などは恐ろしい数の発注があった。どうもパイロットの不足がかなり深刻らしい。

時を同じくしてパトリック・ザラはこれまでの軍事警察組織を統合し、プラント独自の軍事警察組織ZAFI（以降はザフトとする）を設立。私が議会に警告した通りMS「プロトジン」を主力兵器とした。

翌年シーゲル・クラインはコロニー群の一部を農業用プラントに改修することを宣言。プラント理事国による武力介入をも文字通り打ち破り、プラントは完全に独立体制に移行してしまった。

またこの戦闘で圧倒的多数であった理事国連合軍のMAが少数のMSに敗北し、数少ない戦果の大半が無人MAヴァルキュリアによるものであったことが軍内部で大きな波紋を呼んだ。

短期間のうちに理事国の艦隊は大きな損害を受けてしまい、特に被害が大きかった東アジア共和国は「宇宙艦隊の再建に関しては全くめどが立っていない」と発表。今後のプラント独立戦争には関与しないことを暗に示した。

そしてCE70年。

プラントに関する外交交渉の全権を担っていた国際連合の事務総長を含む首脳陣がテロによって殺されると、国際世論は反プラント一色となり、その年に行われた世界各地の選挙でブルーコスモス派が第一党に輝いた。

それはとても細かい分裂で

国際連合首脳陣が爆破テロされた事件、通称「コペルニクスの悲劇」は世界各国に強烈な衝撃を与えた。

連合の担っていた職務を継続できる人材がすべて失われてしまったことにより、国際連合はその真価がもっとも問われる時期に解散せざるをえなくなってしまった。

CE70年2月7日

大西洋連邦、ユーラシア連邦、南アメリカ合衆国、南アフリカ統一機構は今回のテロをプラントによる陰謀であると断言。これはプラントによる地球各国への宣戦布告に等しいと発表すると同時に、国際連合に代わる国際調停機関として地球連合を組織した。

また、地球連合加盟国での兵器の統一規格の作成などを目的として、軍需・エネルギー産業等の企業を中心とした企業連合「ロゴス」を結成。両産業界に多大なる発言力を持つムルタ・アズラエルが盟主として就任した。

翌2月8日

日本国、オーブ連合首長国、赤道連合、汎ムスリム会議、スカンジナビア王国は今回の戦争において中立勢力となることを宣言した。日本国のマキシマ首相の提案で中立国同士の相互防衛協定が結ばれたが、オーブのアスハ代表は「このような軍事同盟とも呼べる協定を結ぶことはオーブの建国理念である中立性を損ないかねない」として協定に加わらなかった。オーブは国際関係において完全に孤立してしまった。

同日、旧ロシア連邦のウラル山脈以東が「東ロシア連合」を名乗り独立を宣言。これを東アジア共和国、大洋州連邦、アフリカ共同体が承認。同4か国はプラントの独立は当然の権利であり、また明確

な証拠もなくテロをプラントの陰謀と断定することは間違っているとして地球連合に対して批難をした。さらにこの4か国は「国際連合の理念を正統に引き継いだ国際調停機関」として地球連邦を創設。地球連邦内の軍需・エネルギー産業などの企業を中心に企業連合「ミュトス」をも創設し、地球連合に対抗していった。

2月10日

大西洋連邦大統領は「これまでのあらゆる批難に対してもプラントから謝罪・釈明は一切なされておらず、反省どころか問題意識すら持っているかがわしい。このような無法をほおっておくことは国際秩序云々以前の問題である。」と発言。地球連合として正式にプラントに対して宣戦布告がなされ、すぐさまプラントの所有する資源衛星「ヤキン・ドゥーエ」に艦隊が派遣されることになった。しかし、同時に地球連合に対して地球連邦から宣戦布告文が届けられたため、プラント派遣艦隊の一部は東アジア共和国の資源衛星「新星」の制圧に回されることとなった。

これまでの間、プラントが行ったのは国民に対する情報操作のみでありプラントの外交、情報戦に対する能力が非常に低いことが浮き彫りとなってしまった。

それはとても細かい分裂で（後書き）

またしてもアズラエルが出てきませんでした。いえ、別に彼がこの間何もしていなかったわけではありません。その辺のことについてはおそらく次話で書かれるでしょう。

東ロシアですが、パワーバランス云々というよりアズラエル氏によるエネルギー業界への参入による弊害の一つです。「原子力に依存していたユーラシア全体がロゴスの影響下に置かれたらますます原子力離れが進んでしまうのでは？」と考えたウラン産出地域の連中が独立を叫んだだけ：なのですが、存外粘りをみせます。次話以降こうご期待。

ご意見・感想募集中です。

それはとてもはかない存在で（前書き）

遅くなつてすみません。ちょっとPCに問題がありました。

それはとてもはかない存在で

「最近調子はどうだね、アズラエル君。」

「いや、もうロゴス盟主アズラエル殿と呼んだほうがいいかな？」

「いやはや、月日が経つのは早いものだ。」

「まったく、ちょっと前に父親から代替わりした新参の若造と違っていたら。」

「今ではわれらより上の立場にいるというのだから、全くもって年月が経るのは早いものだ。」

……くそつ、すぐく頭が痛い。だから僕はこの爺ども、国防産業連合の理事どもが嫌いなんだ。だがそれも今日でおしまいだ。連合に加わっていたもので地球連合勢力圏の企業はすべて「ロゴス」に所属しており、それ以外は地球連邦の「ミュトス」に加盟してこの連合から抜けていった。

つまり、役割のほぼすべてをロゴスが担っている今国防産業連合に存在価値はなく、だからこそ今日をもって解散することになったのだ。

…そのことでこの老人たちは盛んに愚痴を言っているのだ。

「甘い蜜を吸いづらくなってしまうた。」と。

この爺どもの相手をしなくてよくなったとはいえ、仕事の量が減ったわけではない。いや、どちらかというとロゴス盟主になったために仕事量は激増している。やっぱりあの士官学校生を秘書として引っっこ抜いておけばよかった。今じゃもう立派に士官をやってるだろうから引っ張り込むのは難しいだろうな…。

「アズラエル様、農業用プラントユニウスセブン周辺での戦闘で地

が脱帽していたよ。パイロットについてだが、ヴァルキュリアを拠点防御のみならず艦船にももっと搭載しようと思う。それから開発中の小隊単位で遠隔操作できるという無人MA『ハルピュイア』はいつ量産可能になる？軍は結構期待を寄せていたよ。」

「月の両面を死守していただけるなら4月までにも……。先日の戦略会議ではMSの開発を決定したそうですが、ロゴスとしては全面的に協力します。議会の方を頼みますよ。」

「ふん、どうせ表立ってないだけで議員の大半に折り合いをつけておるくせに……。当面の予算は戦争税を可決させれば何とかなる。早く目に見える戦果を出さねばならんからな。こちらからは以上だ。」

現在地球連合軍は「新星」に第3、第5艦隊、月裏側のプロトレマイオス基地に第8艦隊、月表面のアルザッヘル基地に第1艦隊、そしてL1宙域の世界樹に第2艦隊つまりは計5艦隊が存在する。逆に言うと、わずか2回の戦闘で地球連合軍は4個艦隊＝戦力の半分近くを失ったのだ。

制宙権の維持は連合軍首脳部やアズラエルが予想していたよりも難しいことになりそうであった。

それはとてもはかない存在で（後書き）

アズラエル氏ついに地球連合の経済を牛耳ってしまいました。

なぜ新型太陽光宙間発電システムなんてむだに長ったらしいものを使っているのかというご質問がありましたので、お答えします。：ロマンです！！という冗談は置いて、アズラエル氏が大西洋連邦首相と国防省長官にささやかけたのです。「これを作っておけば、赤外線照射位置をずらすだけでユーラシアの都市をどこでもミディアムにできるよ」と…。

まあ、させる気はありませんが…。ちなみに、月の表面にあるダイダロス基地と隣接して発電所が作ってあるので、月を失うと地球連合はもれなくエネルギーも失います。—（ユーラシアはいまだに原子力中心ですが…）

えーとそれから、ガンダム世界でよく出てくるL1とかL4とかいう宙域の位置ですが、調べてみたところLという単語は地球と何らかの星との軌道に係る宙域を表しているらしいです。で、ガンダムSEEDの世界ではL1が月に隣接しているとあったので、地球と月との軌道をもとに考えた設定らしいです。詳しくはWikiで見てください。とりあえず、SEEDの世界ではL1宙域に「世界樹」、L3宙域に「ヘリオポリス」、L4宙域に「新星」「メンデル」、L5宙域に「ボアズ」「Zodiac」があるようです。ちなみに「ボアズ」は「新星」をザフトが奪取した後、L5にわざわざ運んで軍事要塞に改装したものらしいです。

：調べて初めて知りました。
ご意見・感想募集中です。

4/16 ru様、誤字報告ありがとうございます。

それはとても憎しみに凝り固まった感情で

「やはりナチュラルなどというのは野蛮で愚かな劣等人種でしかなかったのだ！！民間人の虐殺に核を使うだと！？やつらは第3次世界大戦から何も学ばなかったのか！おまけに『戦場となった場所で民間人と戦闘員を判別して攻撃することは非常に難しいことは自明の理であり、それを分かっていたうえで民間人を避難させずこちらを批難するプラントには作為的なものを感じざるをえない』だど！？では私はレノアを、愛する妻を作為的に殺したとでも言うのか！シーゲル、やはりプラントの独立だけなぞ生ぬるい。われら新しき優等人種であるコーディネイターが愚かなるナチュラルどもを監督せねばならんのだ。早急に全力でナチュラルどもを叩き潰すのだ！！」

「落ち着け、パトリック。私だってレノアやユニウスセブンのことはつらいのだ。だがまだ我々は地球連合軍と地球で正面から戦うのは無理だ。宇宙戦で我々が圧倒的なアドバンテージを保持しているとはいえまだ連合軍には艦隊戦力が半分以上残っているのだ。ここは慎重に……」

「シーゲル！お前が慎重であることは前から知っているがそれでも今攻めねばいつ攻めるといふのだ。ナチュラルどもが調子に乗って第2第3のユニウスセブンを作ろうなどと考えぬうちに我らの力を見せつけねばならんだろう。さいわいMSジンは地上戦闘においてもナチュラルどもの陸上兵器を圧倒できるのだ。以前評議会に提出した作戦を実行すべきだ！」

「あの作戦にはまだ穴が多くあっただろう。地上で制空権をとれないうちはいくら地上軍を圧倒しても連合軍の圧倒的物量を誇る空軍にやられるのがオチだ。それに5個艦隊を好きにさせていたら補給線も維持できん。ディンがもう少し量産されるまで待て！それよりもユニウスセブンが破壊されたことで食料の確保を考えねばならん。

地上戦も楽になるだろうし、やはり地球連邦と同盟を結んではいけないのか？」

「なぜナチュラルなんぞと手を組まねばならない！？ナチュラルなんぞ連合だろうと連邦だろうと皆同じだろう。食料の備蓄とて3年分あるのだ。それまでにナチュラルからいくらでも搾取できるわ！」

「3年分といっても民間人にとっての3年分と軍で作戦上必要な3年分とは桁が違うことぐらい君だって分かっているだろう！？仮に3年分あったとしても補給線が守れなければ前線には届かない！」

「ではどうするというのだ！ただ座して待てとでもいうのか！そのようなこと評議員もプラント市民も認めんぞ！」

「……L1の世界樹を狙う。」

「何？」

「世界樹を狙えば連合軍もうかうかとはできず、艦隊を派遣するだろう。それに壊滅的損害を与えればしばらくの間制宙権を手に入れられ、地球への物資輸送も可能になるはずだ。それから、戦地でNジャマーの性能を確かめる。」

「Nジャマー……。確か核分裂を阻害するなど研究班が報告していたが、使い物になるのか？効果範囲が狭ければあまり意味がないぞ。」

「それを確かめるんだ。効力があるのなら、宇宙空間はもちろん地球にも散布する。ユニウスセブンのような被害もなくなるし、連合との国力差もだいぶ縮まるはずだ。」

「そうか。それならば納得できる。ではすぐに評議会で審議して準備を……。」

「準備はほぼ整っている。評議会も通るだろう。パトリック、レノアの死、無駄にはしないぞ……！」

それはとても憎しみに凝り固まった感情で（後書き）

ほぼ原作通りです。世界樹攻防戦の前にシーゲルとパトリックの間にこんなやり取りがあっただろうなーと思って書きました。
ご意見・感想募集中です。

それはとても大きな敗北で

CE70年2月20日

その日L1宙域を出発し、長距離偵察任務を行っていた独立艦隊からプトレマイオス基地に通信が入った。

「プラント方面より大規模な艦隊が移動中。目標はL1世界樹の模様」と。

その後の報告から敵艦隊規模はローシア級11隻、ナスカ級5隻と判明。プラント本国の守りを含めなければ現在のザフトのほぼ全力とっていい戦力であった。

地球連合軍は直ちに世界樹周辺に艦隊の集結を命令し、接触することになるであろう22日には第1、第2、第8艦隊が集結することになった。

世界樹には通常のMAメビウス並びに少量ながらメビウス・ゼロが計50機。加えて無人MAヴァルキュリアが250機配備されていた。

同年2月22日

ザフト艦と接敵した連合軍艦隊と駐留部隊は、その後智将とまで言われたハルバートン提督の卓越した指揮もあり互角以上の戦いをしていたが、ザフト特殊工作艦に搭載されていたNジャマーが使用されると、核エネルギーを使用していた世界樹のレーザー要塞砲をはじめ、誘導ミサイルやレーザー連動式無人対空機銃、果ては無線通信まで使用が不可能となってしまう戦場は混乱を極めた。

迎撃システムの大半を使用できなくなってしまった世界樹は流れ弾や轟沈した艦艇の破片から身を守ることができず、戦闘の開始から6時間後、世界樹は地球連合軍の誰もが予想できなかった形で崩壊。ハルバートン提督はその時点で艦隊の戦力が開戦時の3割に落ち込んでいること、世界樹からの指令を失った駐留部隊が飛び回る蚊よ

りもたやすくザフトのMSに撃墜されていることを確認し、撤退を決断した。

アルザツヘル基地にたどり着いた時、戦闘可能な艦艇は1個艦隊分しか残されておらず、それに対してザフトはローラシア級とナスカ級をそれぞれ1隻ずつ失っただけであった。地球連合軍は制宙権をプラントに明け渡さざるをえなかった。

「サザーランド大佐、それは本当のことですか？あそこには確か最新鋭の要塞砲があり、ヴァルキュリアもかなり優先的に配備してあったはずなんですが…」

「事実です、アズラエル様。初戦は強力な要塞砲と駐留部隊をうまく活用して優勢だったのですが、ザフトの特殊工作艦が何らかの物質をばらまいた途端、核分裂反応をはじめとして無線系統なども使えなくなりました。その後は艦隊も混乱して戦闘らしい戦闘もできず、敗北しました。」

そんな馬鹿な…！核も無線も精密レーダーも使えないだと。ヴァルキュリアは司令部のCPUに基づいて無線で指示が出されて飛んでいるんだし、艦艇の対空火器の大半は精密レーダーと連動したものだ。このままでは戦えない。

「レーザー通信は可能でしたか？デブリが多いと使えませんが長距離通信はしばらくそれで我慢するしかないでしょう。それから、そのばらまかれた物をすぐに研究所に持って行ってください。ヴァルキュリアの改修もそれからです。」

「分かりました。早急に手配いたします。」

この戦いで連合軍の艦隊は残り3個艦隊となってしまった。いくら国力のある大西洋連邦とユーラシア連邦とはいえ、2日3日で艦隊が再編できるわけではない。アルザツヘルとプトレマイオスには常

に1個艦隊ずつ配備しておかなければならないから……。アルテミスはともかくとして「新星」は距離的にもあきらめざるを得ないか？ ハルピュイアも改修しなければならぬ……。何としても月だけは守らないと。

それはとても大きな敗北で（後書き）

世界樹消滅……。無人MA存亡の危機。いや、ここで消えたらわざわざ
ざ作者が登場させた意味がなくなっちゃうのでなんとかします。
ご意見・感想募集中です。

ちなみに聖帝様はまだしばらく出ません。（予定）

それはとても不明瞭な未来で

「またお話しできて光栄です。智将ハルバートン提督。本来なら直接お会いしたいのですがあいにくと忙しくて……。」

「よしてくれ、敗戦の将でしか私はないのだ。それを智将などとは……。」

「英雄が必要となったのでしょ……。今回の敗北は大きすぎたのです。それに実際あなたの指揮した第8艦隊よりずっと被害が少ないのに戦果は一番大きい。製造側としてもうれしいですよ。」

「そうか……。ところで、あれからあの物質については何か分かったかね。恥ずかしいことに私は軍内ではつてが多くなってね、あまりわからんのだよ。対抗兵器はすぐにできそうかね？」

「残念ながらあまりいい情報はありません。まずこの物質は、プラントではNジャマーと呼んでいるようですが、核分裂の阻止が主効果であり、無線の妨害や精密レーダーの妨害などは副作用です。ですので、無線もレーダーも完全に使用が不可能になるわけではありません。今回の戦闘のようによほど高濃度でない限り前線で指揮を執ることは可能でしょう。それからこのNジャマー、電波のようなものを放射しておりそれが核分裂の阻止などをしているようです。研究班の報告ではこの電波もどきを遮断する方法は当分見つかりそうもないようです。現在ロゴスでは生産した兵器から無線誘導機能や精密レーダー連動装置を撤去し、赤外線自動追尾型を搭載しなおしています。無人MAも少し値が張りますが、小型化に成功した新型のOSとCPUを直接機体に搭載することで何とかかなりそうです。」

「仕方ない……か。君には大分負担をかけそうだな。……G計画はどうなりそうだ？」

「……内密のことですが、オーブのコロニーで研究する予定です。向こうのモルゲンレーテ側も結構乗り気です。」

「相互防衛協定すら拒否した中立国だぞ。本当に大丈夫なのか？」

「向こうも1枚岩ではないということです。私も何回か視察する予定ですので大丈夫でしょう。」

「頼んだぞ。…ふふふ、あれだけブルーコスモス派嫌いで有名だった私がブルーコスモスの盟主を貴重な人間としているのだから、おかしいものだ。」

「だから、ブルーコスモスはもととただの弱者のための保護団体だったんですよ。今では諜報任務もやっていますが…。それが何でブルーコスモス派⇨タカ派になっているんですか。わけが分かりません。」

世界樹攻防戦での事実上の大敗は大きな波紋を生んでおり、第3次世界大戦の際に築かれたウラル要塞周辺ではいったんはユーラシア連邦有利だった状況から、東ロシア連合の反撃が激しくなってきたりするようだ。いまだにこの地域では表立って地球連邦が参入していないのでユーラシア連邦独自の国内問題ということで地球連合としては援軍を送ってはいないが、これ以上ザフトの勢いが強まれば地球連邦はすぐにでも地球連合に対して積極的に戦線を作ろうとするだろう。ただでさえオホーツク海や北アフリカ各地で小競り合いが多発しているのに、ザフトと地上で戦うことになるのが現実となりそうとなった今、地球連邦との戦争が早期に解決できるとも思えない。この戦争、勝てるのだろうか…。

それはとても不明瞭な未来で（後書き）

地球連合、勝てるのか…？最近自信が無くなってきています。

ご意見・感想募集中です。

4／18 読む専門様 誤字脱字報告ありがとうございます。そして致命的なミスに気づいてくださったことには非常に感謝しております。大幅に変更させていただきました。ありがとうございます！！

4／19 読む専門様 まさかの修正の修正。誤字報告、ありがとうございます。

それはとても驚きの決定で

地球連合軍南アフリカ戦線総司令部 ケープタウン

「総司令官、コンゴ方面の0311戦車師団が後退許可を求めています。」

「ナイロビ国際空港を守備する0305並びに0307歩兵師団から援護砲撃と造園の要請がきています。」

「ユーラシアからの増援によって第3防衛ラインの構築が完了いたしました。」

「よし、これよりナイロビ空港を含む第1防衛ラインを放棄する。予定通り敵に出血を強いつつ後退しろ。」

……民間人のはずの僕が何で南アフリカ戦線臨時総司令官をやっているのだろうか。

CE70年2月18日

世界樹を消滅させ、一時的にせよ地球連合軍宇宙艦隊を行動不能にしたザフトは若干の被害を出しつつも地球の衛星軌道上に到達。南アフリカの中心都市ヨハネスバーグにありつたけの要塞攻略用のミサイルを投下して司令部機能を完全に消滅させたうえで、強襲降下用カプセルを用いてジンを主力とした降下部隊がマストドライバーを擁するヴィクトリア宇宙港を占領した。最初の爆撃で司令官クラスの間をほとんど失ったこの戦線には代わりとなる総司令官を直ちに派遣しなければならなかったのだが、不利な戦局の中総司令官となり地上での戦闘の初の敗軍の将となることを皆嫌がり、人選が決まらなかった。

そんな中オブザーバーと呼ばれていたハルバートン提督は「ア

ズラエル氏ならばザフトについても精通しており、戦術、戦略両面においてそこその能力を持っており、開発側の人間として連合軍の新兵器の扱い方もよく心得ている。」などと発言。それにサザランド大佐をはじめとしてブルーコスモス派の軍人が賛成。大西洋連邦議会では民間人を司令官にすることに對する疑問の声が上がったが、与党にも野党にも多くいるブルーコスモス派の議員がアルスター議員を筆頭に賛成したため、賛成多数で議決された。

で、臨時司令官になってしまった僕は瓦礫と化したヨハネスバークからケープタウンに総司令部を移し、残存兵力で不慣れな地上戦をしなければならぬザフト兵に對して時間稼ぎをしつつ、各地から集まってきた地球連合軍の増援を使って敵を包囲しつつあった。ザフトが量産化を急いでいるらしいデインがいまだ実戦配備されていなかったこともありこちらが制空権を得ることはたやすく、戦闘が始まって2週間たった現在補給もままならないザフトは、主力兵器をジンから鹵獲した地球連合軍の旧式戦車に切り替えつつあるらしい。食料の方も潤沢とは言えないらしく、占領下におかれた地域ではかなりひどい徴発を行っているようだ。

地球連合軍の増援は敵を包囲する形で展開を完了した。ザフト兵は長らく自分たちを苦しめ続けた連合軍の残存部隊を追撃することに必死なようで、陣形は乱れきっている。

「南アフリカ戦線にいる地球連合軍全軍に告ぐ。よく今日までの長い間耐え忍んでくれた。これより反転攻勢をかける。コーディネイターどもに地球が我々ナチュラルの物であることを教えてやれ！」

………僕の秘書はもう手遅れだろうな……

それはとても驚きの決定で（後書き）

アズラエルを前線に出したかったんです。地球連邦をザフトと連動させるか悩みましたが、以前のパトリックの発言を考えてやめました。彼がナチュラルと手を組むのはしばらく無理でしょう。ご意見・感想募集中です。

それはとても輝かしい肩書で

「本日の地球連合通常総会では、南アフリカ戦線における先の戦闘で不利な状況から勝利を導き出したロゴス盟主、ムルタ・アズラエル氏に月華楯賞が授与されることが満場一致で可決されました。これに伴い、大西洋連邦議会では特例措置としてアズラエル氏に名誉少将の地位に任ずる模様です。」

開戦以来の初の大勝利ということもあり、僕は地球連合から英雄になることを望まれたようだ。実際ケープタウンから戻って以来講演の依頼はひっきりなしであり、ロゴス盟主としての溜まっていた仕事を片づけるという理由がなければおそらく現在僕は世界中の士官学校の講堂に行っているだろう。残念ながら現状は僕にとって史上まれにみる忙しさを誇っており、いくつかの会談をキャンセルしつつ報告書や重要人物との会見をしていた。

「鹵獲したジンのOSを最優先でG計画の部署に送ってください。CPUの方はこちらの方でも解析します。ザフトの新型MSについての報告はありませんか？」

「こちらにまとめておきました。どうやらデインのみでなく地上戦用のMSなども開発されていたようで、現在量産準備に入っているようです。Nジャマーの研究報告ですが、特に芳しいものはありません。キャンセラーに関してはめどすら立たないようです。」

「交渉していた三菱重工ですが、リニアガンタンの車体に使う合金のみライセンス生産の許可を得ました。MSの方は却下されました。」

「ユーラシア連邦国防大臣から会談の要請がきています。マスドライバー施設の防衛力強化に向けてアズラエル航空の次世代戦闘機A

Z-71の優先的販売を求めているようです。」

……体があと2つ欲しい……

「やはり今回の作戦は強引過ぎたか……」

「……」

「いくら評議員の大半が賛成したとはいえ、国防委員長のお前が反対してくればもうちょっと待てたはずだ。ディンやバクウが配備されるまでぐらいなら……。パトリック、なぜもう少し待てなかった。」

「……調子に乗ったナチュラルどもに我々の本気を見せつけねばならなかったのだ……」

「それだけのためにお前はあれだけの同胞を死地に追いやったのか、パトリック！我々の第一の目的は復讐でもナチュラルの根絶でもなく、コーディネイターによる国家の建設なんだぞ。国民を湯水のごとく失っても良いわけではないのだ！指導者である我々が短絡的になるな……！」

「……すまない。確かに私は、いや我々は短絡的だったようだ。冷静にならねば、な……」

「ここまで共に歩んできたのだ。冷静になってくれるのならそれだけでいい。……今回のことで評議員はもとより国民も冷静になっただろう。私は今一度評議会で『オペレーション・ウロボロス』を提案しようと思う。次は賛成してくれよ。」

「分かった、あれならば時間はかかっても成功するだろうしな……」

だが本当にNジャマーを散布するのか？以前からお前が言っていた地球連邦との同盟が難しくなると思うが。」

「ジンのライセンスを与えることで取引しようと思う。シグーが量産化できればジンは旧式化してしまうし、連合の方は先の戦闘で鹵獲しているだろう。なによりナチュラルではジンを生産することはできて操縦することが難しいだろうからな。」

「なるほど。後は核エネルギーを使えなくなった地球連邦がどの程度利用できるかだな。」

それはとても輝かしい肩書で（後書き）

ええ、予想通りアズラエル氏の戦場行きが決まりました。（大抵は司令部ですが）

というよりも、性格がまともになってしまったアズラエル氏では原作通り戦場の指揮を執ることなどできないのですよ。後、作者はアズラエル氏とある人物とくっつけたいのです。その布石でもあったりして。そのうちに外伝を作る予定なので、そこでその人物との馴れ初めを書く予定です。

ご意見・感想募集中です。

4／21 読む専門様 誤字報告、ありがとうございます。

それはとても少ない影響で

CE70年4月1日

ザフトはプラント評議会でひそかに可決されていた作戦、「オペレーション・ウロボロス」の発動を宣言。あらかじめ衛星軌道上に移動していた特殊工作艦より地上に、公式発表によると20000発ものNジャマーを打ち込んだ。それと同時にプラントは地球連邦と軍事・経済同盟を結ぶことを宣言。地球連邦構成国に多くのソーラーパネルと、シグーの正式配備によって在庫が増えつつあったジンを食料などの民生品と引き換えに提供した。

これらの動きを予想していた地球連合は、大西洋連邦の領土であったグレートブリテン島からユーラシア連邦にすでに大規模な送電線を敷設しており、若干の供給不足はあるものの深刻な事態に陥ることだけは避けることに成功した。

しかし連合、連邦共に海上・海中戦力の大半が原子力型のため、多くの空母、潜水艦、大型輸送艦が航行不能となった。ロゴス盟主アズラエル氏はこれらの戦力の動力をバッテリーと化石燃料を組み合わせたものに現在改修しつつあると発表。遅くとも1ヶ月以内に海上戦力の半数を回復させることを約束した。

また、需要が急増することになった化石燃料の問題に対して、「当面は東ロシア連合との海上戦線で優勢な北極海でメタンハイドレードを採掘し、それによって補う。将来的には電力の供給を安定化させ、海水から水素を作り出して燃料としようと思う。」と発表。海上戦力の復活が一朝一夕にはできないことが判明した。

ザフトの陸戦、空戦、海戦用の新型MSが発表されたことに対抗する形で、ロゴスは新型CPU、OS搭載の無人リニアガンタンク「AZ70式」、無人MA「ハルピュイア」、新型戦闘機「AZ-70」、長距離衛星レーザー誘導式駆逐艦「ローレライ」を次々と発表した。これらの大半はNジャマー影響下においても戦闘できる無

人兵器で、激化する戦闘でのパイロットやクルーの不足を予想して開発された。

翌4月2日

軍事同盟の協定に基づき、大洋州連合のカーペンタリア湾にザフト軍基地を建設。地球連合軍は手持ちの旧式ディーゼル潜水艦を全て派遣。基地建設に協力していた地球連邦軍の数少ない重油エンジン搭載の大型輸送艦とその護衛艦を撃沈するも、ザフトの新型海中戦用MSグリーンには全く抵抗できずに大敗してしまった。

CE70年4月5日

北極海のメタンハイドレード採掘地確保のために地球連合軍大西洋連邦所属空軍がウルル・北極海戦線に派遣されたことを理由に地球連邦は地球連邦軍東アジア共和国所属部隊の派遣を決定。翌4月6日から大規模な戦闘が開始された。この戦いの初戦で空軍に大きな損害を受けた地球連邦軍は北極海から一時的に後退することを決定した。

結果、プラントではNジャマー散布による地球連合の国力減退の成果が予想以上に少ないとして取り上げられることとなった。

それはとても少ない影響で（後書き）

若干スランプ気味です。というのも、大学生活が急に忙しくなって小説について考える時間が減ってしまったのに、新しい作品のアイデアが出てきちゃったりするから。まだ、作る気はありませんが：ご意見・感想募集中です。

それは非常に厳しい勝利で

「アズラエル様、NSSC」（新型太陽光宙間発電システム）のアルザッヘル発電所2号機、3号機の建設状況についての報告です。2号機は5月までに、3号機は6月までに完成しそうです。」

「そうですか、後は完成までに、いや完成した後もアルザッヘルを守れるかですね。大西洋連邦大統領にアルザッヘル基地の防衛力を強化するように要請してください。あそこが陥落したら工業力の10パーセント、電力の80パーセントが無くなるとも言つてくださいよ。」

ユーラシア連邦は原子力発電所を使用できなくなったことで、電力の大半を大西洋連邦から輸入することになってしまった。NSSCの運用には多額の資本はもとより、技術と運用経験が不可欠であるために自前で電気を作ることがなかなかできないのだ。ユーラシア連邦内では中央アジアに侵攻することでソーラーパネルの原料となるケイ素を確保しようという動きもあるが、燃料の不足から実現は難しいと言わざるを得ない。今のところメタンハイドレードを燃料にできるのはエンジンの関係上艦艇のみなのだ。石油の枯渇の深刻な現在、長距離の陸上での行軍はコストがかかる。ゆえに、地球連合国構成国ということで割安価格で販売してくれている大西洋連邦から輸入しているのだ。

地球連邦各国にはプラントから大量のソーラーパネルが提供されており、さらに構成国が工場をフル回転させてソーラーパネルを増産させているのだが、ソーラーパネルの生産にも電力を消費してしまうためになかなかうまくいっていない様子だった。

CE70年5月1日

プラントの最高評議会は「Nジャマーの散布のみでは『オペレーション・ウロボロス』の初期の目標を達せえなかった。」として、地球連合の電力の大半を生産しているアルザッヘルを攻略する作戦「プロメテウス」の発動を採択した。これに合わせてザフトは5月3日、ジンハイマニューバやシグーといった最新鋭MSによって固められた精鋭部隊をとりあえずの橋頭保として月面のローレンツクレーターに上陸させた。地球連合軍は残っていた第3・第5・第8艦隊のみならず編成途中であった第4艦隊まで投入。プトレマイオス基地にはヴァルキュリア300機、ハルピュイア200機、メビウス100機、メビウス・ゼロ50機を配備し徹底抗戦の構えを見せた。

5月3日

ローラシア級15隻、ナスカ級7隻に加え総MS数130近くのザフト軍は防衛線を敷いて待ち受けていた地球連合軍とエンデュミオンクレーターで激突。エースパイロットを数多く含むザフトMS部隊を前に当初、地球連合軍は不利な戦いを強いられていた。しかし、ハルバートン提督に指揮された地球連合軍は粘り強く戦闘を続け、無人MAが生産拠点の近くということもあり、連日数多く補充されたこともあり次第に戦線を持ち直していった。コーディネーターの中の、さらにエースであったとしても所詮は人の子でしかないザフトMS部隊は次第に消耗の度合いが大きくなり、6月2日にはとうとう現地司令官は作戦の継続を断念した。ザフトは月から完全に撤退することとなり、地球連合軍は宇宙戦で初勝利をすることができた。

が、連合軍の被害も非常に多く1個艦隊の壊滅に加え、無人MA897機、有人MA113機を失うこととなった。

それは非常に厳しい勝利で（後書き）

パトリックは残念ながら狂人の資質を秘めています。それをシーゲルが抑えているというだけなので、シーゲルが退場すれば当然…。
ご意見・感想募集中です。

それはとても混沌とした様子で

大西洋連邦領アラスカ。

その太平洋に面するとある場所に地球連合総本部JOSH-Aが存在する。実はここから10キロほど離れた場所にはNSSC（新型太陽光宇宙発電システム）の赤外線受容基地が存在し、この近辺は文字通り地球連合の心臓ともいえる。JOSH-Aに隣接する形でロゴスの総本部も存在し、現在職員の大半は地球連合軍からの報告をもとにザフトの「プロメテウス」作戦による被害の事後処理などを行っていた。

MA損失1000機以上、1個宇宙艦隊の壊滅、その他の艦隊も無傷ではなく、地球連合軍の1年分の予算はこの戦いで底をついたと言ってしまったもいい。月面に建設されていた工場は全て戦闘開始後から破損した艦艇の修理と無人MAの生産に全力を挙げており、生産したものは全てエンデミオンクレーターに送っていたため、戦闘開始前に注文していた分の納期は守れそうもない。とはいえ月の防衛力を下げるわけにもいかなかったため、地上の生産ラインの一部を宇宙軍再建のために回すこととなり、結果として現在最も戦っていない海軍が割を食うこととなった。

新造される予定だった空母は全て1か月延期となり、補助艦艇の新造は2割減となった。カーペンタリア近海での作戦行動は当面延期となり、それら全ての決定に何らかの形で関与しなければならなかったアズラエルはアラスカの地で睡眠時間を返上することとなった。

ここ1週間ほど自室の壁を見たことがない……。見えるのは書類だけ。寝る時間をなくして頑張ると部屋が若干広くなり、疲労に負けて寝

てしまうと急速に部屋が狭くなる。報告書を届けに来る部下は悲痛な顔で書類を届けに来るし、以前は話すたびに嫌味を言ってきたあの頑固爺どもがテレビ通信越しにこちらに向けてくる顔には同情といった表情が読み取れる。

「アズラエル様！ザフト軍艦隊がカサブランカに現れました。連合軍艦隊は大敗したそうです！！」

「…ジブラルタルの防衛部隊に連絡。こちらに報告書を出さなくても良い。これ以上書類を増やすな！」

「わ、分かりました。」

……疲れた…。

連合軍艦隊が敗れた時点で誰もが予想した通り、地球連邦軍とすでに交戦を開始していたジブラルタル基地はザフト陸上部隊との戦闘に耐え切れず、スペイン方面に撤退することになった。地球連合軍上層部はザフトの次の狙いをスエズ運河と予想。残った地中海艦隊と共にエルアラメイン近郊に防衛線を築いた。

この日、ユーラシア連邦大統領は地中海沿岸の各都市とに対して非常事態宣言を発令。コーディネイター支援団体に対して無期限の活動停止命令を出した。ヨーロッパ各地では「ブルーコスモス」を名乗る勢力によるテロが頻発し、自らの近くに敵対勢力がいることに対する社会の不安が表面化しだした。

それはとても混沌とした様子で（後書き）

最近文章が雑になってきている気が…。

アズラエル氏に何かイベントを起こさせようかとも思うのですが彼、過労で倒れそうですし…。

ご意見・感想募集中です。

それはとても大きな組織で（前書き）

大学が忙しくってちょっと遅れました。これからもペースが乱れるかもしれませんが、よろしくお願いします。

それはとても大きな組織で

「最近、ブルーコスモスの動きがよく分からないんだけど。」

「は？…活動報告は毎週提出されておりますが…」

「そうじゃなくてさ、アズラエル財閥傘下の『正式な』ブルーコスモスは制御下におけてるんだけど、最近『自称』ブルーコスモスが多すぎると思うんだよ。よくよく考えるとブルーコスモス派の議員や軍人も大半とは接触とってないし…。一度、会議みたいなのを開いて組織としての上位者を決めなきゃいけませんね…。下手にテロなんか起こされて『正式な』ブルーコスモスまで批難されたら手におえません。」

「なるほど…。では来月あたりとりあえずブルーコスモス派を表明している地球連合内の議員と軍人、それにある程度の規模を持つ団体の指導者を集めましょう。場所についてはどうしましょうか。」

「財閥本社に普段使っていない大ホールがありましたよね？そこで開催します。」

「分かりました、まとめておきます。」

「…では『世界ブルーコスモス連盟』盟主はムルタ・アズラエル氏に決定します。本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。」

翌月に開かれた会議ではブルーコスモス派を名乗っていた者たちの

統合組織を作ることと決定し、盟主として僕が就任することとなった。地球連合内ではサザーランド大佐やハルバートン提督、アルスター議員といった僕と個人的付き合いの深い人物たちが僕の人柄について語っていたらしく、各界の良識派といわれる人々の中にもかなりのブルーコスモス派が存在した。どうやらビクトリア宇宙港防衛戦の際にザフト軍が現地住民にかなり高圧的であったことや、食料や作業員としての人夫をかなり強引に徴発していたことは有名らしく、コーディネイターの謳う「理性」とやらの不信任を抱いている人も多いようだった。

「アズラエル盟主、久しぶりだな。」

「これはハルバートン提督。直接会うのはずいぶん久しぶりですね。月ではずいぶん忙しいようではないですか。」

「艦艇は新品なほど優秀だが、新兵は全く役に立たないからな。君のところが開発してくれたCPUがなかったら艦隊としての行動が全くとれなかったよ。それに、忙しさの上では君の方がずっと忙しいだろう。」

「最近、私の執務室が増えましてね。」

「：？　どういうことだ？」

「一部屋丸々書類で埋まってしまったんですよ。：秘書を5人から15人に増やして対応しているんですがね。」

「今どきまだ紙を使っているのかい、君は。データにしてしまえば物理的量は減るだろう。：まあ仕事量は変わらんが。」

「データはどんなにきれいに消したつもりでも復元できてしまいますからね。その点、紙なら燃やしてしまえば無くなりますから。：それよりここだけの話、宇宙軍は再建までの程度かかりそうなんですか？　最悪、アルザツヘルだけは何としても守らないと地球連合は負けたも同然なんですが。」

「月の防御だけなら今でも可能だ。だが、『新星』はあきらめざるを得んかもしれん。：ザフトの補給路の妨害もしばらくは厳しいな。」

新兵が慣熟するまでもだしばらくかかる。それに護衛のMSを討つのにMAでは被害が出すぎる。：君が期待するような働きを我々ができるようになるまでしばらくかかりそうだ。：G計画の方はそうなっているんだ？あれができればまた話は変わるのだが：」

「まだしばらくかかりそうです。鹵獲したジンのOSとCPUを見たのですが、あれでは一般のナチュラルには扱えません。CPUなどで補えない部分を彼らは全てパイロットの技量に丸投げしているようで。適性のある兵士が最低でも6か月は訓練しないと宇宙では戦えません。現在、一般のナチュラルでも訓練次第で扱えそうなOSとCPUを開発させているのですが、まだまだかかりそうです。」

「：そうか。では、もう少し粘らねばな。」

「ええ、8か月もたてば制宙権は圧倒的物量を誇る我々の物です。：それより、アルスター議員が最近やたらと結婚させたがるんですよ。提督からも何とか言ってももらえませんか。」

「ははは。君もだいぶいい年なんだ。アルスター議員のいうことも尤もではないか。それに、今の君の身分なら引く手あまただろう。なんせ若干30歳でロゴス盟主にして全国ブルーコスモス連合の盟主、そしてビクトリアの英雄である名誉少将閣下なのだから。大西洋連邦の大統領よりも偉いのではないかね？」

「それはそうですが…。しかしアルスター議員は自分の娘を紹介してくるんですよ。彼女はまだ14です。いくらなんでも…」

「…それは…。」

それはとても大きな組織で（後書き）

アズラエル結婚の危機！というよりもロリコンレッテルの危機！！
ブルークスモス内紛！？

いえ、ありませんが。とりあえず地球連合軍は現在押されています。次話では地球連邦も新たに圧力をかける予定。でも、耐え抜きます。（予定）しかし、連合が反転攻勢かけられるようになるよりも先にアズラエル氏が先に過労死する危険は潜在的に存在しています…。頑張れ！負けるな！！

ご意見・感想募集中です。

4／27 自律人形様 誤字報告ありがとうございました。

それはとてもゆるやかな後退で（前書き）

今回ちょっと短いです。

それはとてもゆるやかな後退で

CE70年7月1日 地球連合軍ウル要塞総司令部

「おはよう、何か異常はあったかね？」

「おはようございますクロイツェフ中将。現在戦線に重大な異常は発生しておりません。：ただ、最近連邦軍の航空攻撃が激しくなっている気がします。」

「北極海の航空戦力をだいぶこちに回しているらしいからな。対空陣地にはあまり無理をしないように言っておけ。どうせこの辺りの守らなきゃならん戦車はほとんど隠蔽し終わっている。X線レーダーが使えるならともかく、Nジャマーの影響下で見つけることなどできんよ。」

「そうですね。通信手、各対空陣地に通信、『こちらの：』」

「こちら司令部前警戒班！司令長官！突然やつらが司令部まえに！！」

「どうした！？奴らじゃわからん、落ち着いて正確に報告しろ！」

「それが、大量のジンが突然！うわっ、く、来るな！」

ザザザザザ、プツツ

「おいどうした、応答しろ！くそっ。」

「長官、ゲートに侵入されました！抑えられません！」

この日、ウル戦線総司令部が地球連邦軍の奇襲攻撃により壊滅。戦線にいた地球連合軍は混乱状態に陥り、3日にはウル要塞線の放棄が決定される。

同時に地球連邦加盟国の協力で北アフリカを横断することに成功したザフトは、新型MSのバクウとザウート、ディンを駆使し、待ち受けていた地球連合軍スエズ運河防衛部隊と戦闘を開始した。当初、機動力に優れつつも火力と鉄量で圧倒的に不利であったザフトは押されていたが、バルトフェルド司令官による機動力を生かし

た巧妙な罠に連合軍のリニアガンタンク部隊ははまってしまい、スエズ防衛に失敗してしまうこととなる。

また宇宙では地球連合軍よりは損害が少なかったとはいえ、いまだ再建途中であったザフト宇宙艦隊が、国民の戦意高揚を求めた評議会議員たちの要請を受けて地球連合所有の資源惑星「新星」攻略を開始した。しかし、以前から「新星」の防衛を絶望視していた地球連合上層部は駐留部隊をすでに全て撤退させており、アズラエル氏の提案で無数のブービートラップまでも仕掛けていた。これにより強襲降下上陸を行ったザフトMS部隊は少くない損害を受けた。

ザフトに少くない損害を与えつつも、地球連合軍は緩やかに戦線を後退させ続けていた。

それはとてもゆるやかな後退で（後書き）

ザフトは損害を無視できなくなりました。なのでしばらく積極的な行動はとれません。主な戦いは連合VS連邦になりそうです。ご意見・感想募集中です。

それはとてもきれいな未来で（前書き）

今回そんなに面白くないような…
華が欲しいですねえ。

それはとてもきれいな未来で

地球連合軍総司令部、JOSH-Aは荒れていた。

7月1日に狙って行われたとしか思えないザフト、地球連邦の各地での攻勢に対して全ての戦線で敗北を喫したことがその原因であった。地球連合軍の宇宙軍、地上軍、海軍の各司令官たちは大ホールに集まり今後の戦略方針について丁々発止議論していた。

「宇宙に関してはしばらくザフトは動けないはずだ。こちらもそう余力はないのだから無理な攻勢を仕掛けるべきではないだろう。」

「海軍としては早急にスエズもしくはジブラルタルを地上軍に攻略してもらいたい。地中海の制海権を奪われたままではユーラシア連邦のドックの半数が使えないに等しい。」

「それは難しいだろう。ジブラルタルもスエズも渡河しなければ攻略できないのだ。砂漠で機動力の圧倒的に上回るザウートやバクウを撃破できるほどのリニアガンタンクを渡河させようものなら無防備なところを一方的に攻撃されてしまう。せめて制空権が完全にこちらの物なら何とかなるが……」

「空軍は何かできんのか？重力圏内ならばMSよりも戦闘機の方が圧倒的に有利だと豪語していたではないか。」

「それはそうですが……。盟主アズラエル、何かいい案はないでしょうか？」

「……なんで軍事の専門家が私に聞くんですか。無理なんだったらしようがないでしょう。さいわいシナイ半島にもスペインにも対空火器を大量に配備しているんですから、しばらくは守勢でいいじゃないですか。ドックが使えないのは痛いですが無茶な作戦立てて負けるよりはましです。……サザーランド大佐、ハルバートン中将、なに笑ってるんですか。分かってたんなら言うってくださいよ。まったく」

…。それよりも東部戦線です。ウル要塞線が敗れたとはいえ、地球連邦のジンは動きは悪いし、数も多くはないし、コーディネイターのOSとCPUをそのまま使っていますからナチュラルで操縦適性のある兵士なんてそんなにいませんよ。山岳戦でなければ絶対に負けません。いっそ中央アジア平原から攻勢を仕掛けたらどうです。リニアガンタンクなら平原で負けません。」

「だが、数が揃わん。スエズ攻防戦でかなりの数のリニアガンタンクを失ってしまったからな。グーンのせいで大西洋連邦からの輸送もままならんし。」

「シーレーンの防衛はどうなっているんです、海軍さん。もう駆逐艦に関しては新型艦も完成していると思ったのですが…。」

「大西洋に集中して頑張っているのだが、やはりジブラルタルがとられたのが大きくてな。なかなか効果が上がらん。だがようやく最近ブリテン島経由での輸送に目途が立ちそうだ。たしか1週間もすれば大陸にかなりの物資が届く。」

「では今後1か月以内に中央アジア戦線で大攻勢に転じるということ。盟主アズラエルから何か要望はありますか。」

「できれば中央アジアのレアメタルを採掘したいので、そのあたりをよろしく頼みます。それから、これは極秘のことですが、モルゲンレーテ社がG計画に協力してくれることが決まりました。」

「おお！ではようやくわれわれもMSの生産に目途が立つということだな？」

「ええ。OSやCPUでは我々ログスが勝っているのですが、装甲や機関係統ではオーブが上ですからね。新型宇宙戦艦も共同開発する予定です。」

「どのくらいかかりそうなのだ？」

「来年までかかると思いますよ。私もできるだけ視察しようとは思っています。」

「そうか、一時はどうなるかと思ったが、この戦争の終末もようやく見えてきたな。」

それはとてもきれいな未来で（後書き）

困った。CE71年までのイベントが思いつかない。うむむ。
感想・ご意見募集中です。

それはとても激んだ地下で（前書き）

一応イベントです。フレイとの邂逅をさせるという案もいただきましたので、次回か次々回にでもさせようと思います。

それはとても激んだ地下で

「最近の地球連合はなんじゃ！本当にプラントと戦う気はあるのか。」

「まったく、コーディネイター共と戦って負けたかと思えば、地球連邦にも負けるとは…」

「嘆かわしいことこの上ない！連合上層部はあの空のネズミどもにやられた被害を本当に理解しておるのか？」

「連邦も連邦だ。欲にまみれてよりにもよって地球共通の敵と組もうなどとは、何を考えておるのだ！」

ユーラシア大陸某所。そこにそびえ立つ立派な館の一室で、かつては経済界の一翼を担っていた老人達が盛んに愚痴を言っていた。彼らはコーディネイターによるNジャマー散布や地球連合軍のザフトとのたび重なる敗北に適応することができず、権勢を失いつつある老人達であった。彼らは影響力の低下を単純にコーディネイターによる弊害であると考え、少し前までは自称「ブルークコスモス」の過激派としてテロをも辞さない行動をとることで有名であった。しかしアズラエルによる「世界ブルークコスモス連盟」の設立と組織の意思統一によって彼ら過激派は政界から勢力を駆逐され、今では同志を集めての愚痴のいいあいしかできなくなっていた。

「だめですねー、皆さん。そんなんではいつまでも私たちの『青き清浄なる世界』は取り戻せませんよ。」

ひとしきり老人達の愚痴が話し終わったとき、まるでそれを見計ら

ったかのようにそれまでわれ関せずとばかりに少し離れた席で黒猫をなでつつワインを飲んでいた若い青年がまるで小ばかにするかのような物言いで老人達に言った。

「：どういことだね、ジブリール」

「私たちナチュラルの共通の敵はコーディネイター共なんですよ。ちよつと負けたからといって本来の敵を見失っちゃっているんじゃないあダメダメです。」

ロード・ジブリール。直訳すると「ガブリエル導師」になってしまふどう聞いても名前負けしているような人物だが、かつてユーラシアにおいて生命工学系統の企業では最高峰の財閥であった「ジブリール財閥」も総帥であり、その政治的手腕には世界中から一目置かれていた。しかしジョージ・グレンを始めとするコーディネイターの出現により生命工学部門での最高峰という地位を維持できなくなり、かつてのような権勢を誇れなくなってしまった人物の一人となった。ブルーコスモス内ではそこそこの地位に入るが、コーディネイターの絶滅をせんとする彼の考えは盟主であるアズラエルの方針に反しており、盟主の座を奪わんと考えてもいた。

「ですが最近のブルーコスモスの活動が甘いというのも事実ですしねえ。盟主は本当にコーディネイターを罰そうと考えているのでしょうか。」

「：あまり盟主のことは批判せん方がいいのではないかね？ 今や彼は地球連合の英雄だ。連合内最大の影響力を持っているといつてもよい。：それに彼子飼いのブルーコスモス諜報部門はプラント以外の諜報も行っていると聞く。」

「：そうですね。ですがここの防諜対策は現在万全です。皆様にお話しておきたいことがあるのですね。」

「ほう、わざわざわれら全員を集めたということはそういう事な

んでしょうな。」

「ええ。実はザフト内部の、それも隊長格の人物から我々に対して接触してきた人物がいますねえ。」

「何！？…罠ではないのか？それにコーディネイターの助力など受けるわけには…」

「ええ、それは分かっています。ですが罠だとは私は思えませんでした。どうも彼はコーディネイターではないようですねえ。それにあるきたりな恨みがどうかではなく、純粹に利害関係を求めているようなんですね。」

「ナチュラルでザフトの隊長格だと？…それは本当なのか？」

「ええ、皆さんもご存知の方だと思いますよ。」

「名前はラウ・ル・クルーゼ。ネビュラ勲章持ちの英雄様だそうです。」

それはとても激んだ地下で（後書き）

ジブリール登場です。一応ジブリールはラテン系の読みだとガブリエルになるので…。彼を親しげにファーストネームで呼べる人はいるのでしょうか？

「ロードさん。」「ロード様。」「ロード。」…考えてみるとちょっとシュールです。

ご意見・感想募集中です。

それはとても暖かい会話で（前書き）

フレイとの初顔合わせです。

それはとても暖かい会話で

地球連合軍が中央アジア制圧の準備に追われだし、ジブリールらが密談をしていたそのとき、ロゴス盟主にして地球連合軍名誉少将であるムルタ・アズラエルは追い詰められていた。

…主に精神的に。

CE70年7月5日　ワシントン　N・A・プリンセスセンチュリーホテル

「…えー、ご趣味はなんでしょう？」

「小さい頃からピアノとバレエをやっていて、それが…」

「ほお、ピアノは私も聴くのは好きです。弾くことはできませんが…。」

おのれアルスター。まさか本当に娘と見合いをさせるとは、残念ながら「可能性はあるなあ」と思いつつも良識的でないだろうと願っていたのに。何で自分の半分にもならない子供と見合いをしなきゃいけないんですか。ハルバートンもサザーランドも苦笑はしつつも止めてくれなかったし…。

「あの、どうかなさいましたか？」

「ああいえ、少し考え事を。アルスター嬢も大変ですね。普段お父上はとても忙しいでしょうし、たまの休日もこのようなおじさんと食事をするようになりますし。」

「いえ、そんなことはありません。正直、ロゴス盟主で地球連合軍でも偉い方って聞いて、『きつと脂ぎった権力の虜になってる気持

ち悪いおっさんよ。なんでパパはそんなのと見合いをさせようとするの?』って思っていたんです。でもこんなスマートで優しい方だったんですから、パパが見合いをさせようとする理由も分かったわ。」

「嬉しいことを言ってくれますね。：ですが本当のところ、こんな年が離れてる人と結婚をしたいとは思わないでしょう。」

「あら、私は気にならないわ。年齢差以上に内面と地位が良すぎるもの。：こんな方に慕われてる方はとても幸せでしょうね。」

「：！お気づきでしたか。でしたらあなたにはとても悪いことをしてしまいましたね。：いつ知りました?」

「知ったっていうか：。なんとなく分かったのよね。少なくともパパは知らないみたいよ。それで、どこのどんな人でどこまで進んでいるの?」

「かないませんね、まったく。どこの誰かはいえませんが、まだ片思いですよ。彼女も私も今は忙しくて会うこともできませんからね。」

「ふーん。言えないってことはそういう立場にいるってことよね：。連邦の人?コーディネイター?それとも軍の人?」

「：ノーコメントで。」

「あっ、軍の人なんだ。へー。身分違いの恋みたいねー。」

「：今回のお詫びもかねて、1つ何か叶えてあげましょう。言ってくれませんか?」

「言わないわよ、誰にも。でも：そうねえ、じゃあこれからアズラエルさんのことをおじ様と呼んでいいかしら。」

「構いませんが：。そんなことでいいのですか?一応、アルスター嬢のお父上の休暇をひねり出させることも可能ですが。」

「私のことはフレイって呼んで頂戴。：確かにパパのお休みはとても魅力的だけど、そんなことしたら他の議員さんから恨まれちゃうわ。それに：うちはパパ以外家族がいないから：。」

「そうですか：。ではそうしましょう、『フレイ』」

「ありがとう！」

「そういえば、学校のほうは今どこに通っているのですか？」

「オーブのヘリオポリスにある学校に行っているわ。月のアルザッヘルが学校がよかったんだけど、パパが『あそこは危ない』って言うから…。」

「そうですね、現在アルザッヘルはザフトに狙われていますからね。…ですが、ヘリオポリスですか…。」

「ヘリオポリスがどうしたのかしら？」

「いえ、何でもありませんよ。」

それはとても暖かい会話で（後書き）

帰省先から帰ってきました。ネタも増えました。がんばれます！
ご意見・感想募集中です。

それはとても新しい戦いで（前書き）

一応、日本軍初登場の巻き。

それはとても新しい戦いで

CE70年7月23日

カスピ海北岸にて小競り合いをしていた地球連邦軍機甲部隊に対し、突如として大規模な砲撃と爆撃が加えられた。秘密裏に集結していた最新鋭のリニアガンタンクを配備してある4個戦車師団を核とした中央アジア突破作戦―（作戦名は『マルス』）の作戦部隊が攻勢を開始したのである。司令官にはスエズで惜しくも敗北を喫したとはいえ、機動戦術に類を見ない才を持つモーガン・シュバリエ少佐がログス盟主アズラエルの後押しもあり、異例の大抜擢で作戦総司令官に任命されていた。ログス盟主からの期待と名誉挽回のまたとない機会を感じ取ったシュバリエ少佐は、空軍と緊密な連携をとることでお手本のような電撃作戦を中央アジアで展開して見せた。地球連合軍の広報は大平原を戦闘機の援護を受けつつ整然と疾走するリニアガンタンクの映像を公開し、地球連合軍の健在振りをアピールした。

7月25日

中央アジアにおいて思うように戦線を再構築できず焦りを募らせた地球連邦軍は、モスクワのすぐ隣に位置する衛星都市ウラディミルがなかなか陥落しないこともあり、この方面での攻勢をしばらく凍結させることを決定。配備予定だった師団や予備として残していた部隊、そしてパイロット適正の関係上1ヶ月あたり50機しか補充できない虎の子の部隊であるジン等をかき集め、北極海の制海・制空権を手に入れるためにスカンディナ비아王国に対して宣戦を布告した。

若干旧式といえる戦車とはいえ、数において圧倒的に勝る地球連邦軍は瞬く間に旧フィンランドを制圧。スカンディナ비아山脈にも攻勢を開始した。

日本の首相であり、中立国間の相互防衛協定において議長に就任していたマキシマ首相は地球連邦軍の行動に対して「国際法・秩序を完全に無視した行動であり、直ちに撤収・謝罪・賠償が行われないのであれば相互防衛協定に基づいてスカンディナビア王国を支援する。」と発言。協定加盟各国は地球連合の勢力圏である北極海経由で援軍を派遣した。日本軍にはMS部隊も含まれており、世界各国がMS同士の初の戦いに注目を向けていた。

CE70年7月30日 スカンディナビア王国領キルナ鉄鉱山
ノルウェー側より上陸した協定加盟国軍は分散して前線に配置され、山岳戦闘にアドバンテージを持つとされる日本軍の特殊戦車師団一（日本軍のMS部隊）は山脈において最前線となっているキルナ鉱山に配置された。それまで戦闘を行っていたスカンディナビア王国軍山岳歩兵部隊によると地球連邦軍の側もMSジンの部隊の大半を山脈に投入しているようであり、日本軍のパイロットも初の対MS戦ということで緊張の度合いを高めていた。

「三佐殿、汎イスラム会議空軍より連絡。『上空のエアカバーを確保。但し支援するほどの余力は無い。』」

「そうか、ご苦労。一尉、どうやらMS同士の戦いだけですみそうだな。」

「そうですね。ロボットの戦いは日本が大先輩であるってことを教えてやりましょう。…ですが三佐、技術局が特殊装備でくれたビームサーベル、あれ付けるとなんか本当にアニメの世界みたいですね。」

「…まあな。広報はあれを持った特殊戦車の戦闘シーンを次のポスターに貼る気満々らしい。こちらは接近戦をわざわざしようとは思っていないのだが…。」

「ですよ。ジンでしたっけ？のスペック見たんですが、あれの機動力で地上戦とか馬鹿でしょう。はっきり言って、ウルル要塞の陥落だって奇襲で司令部が潰れたからであって、ジン自体はそんなに活躍して無いでしょう？何でかスペック通りの性能も出し切っていないようですし…。」

「もともと宇宙戦の想定だからな。OSもCPUも宇宙空間での姿勢制御やら光量調整やらにほとんど使われてて、足りない部分は全部パイロット任せらしい。」

「うげ、よくそんな欠陥機に乗ってますね。連邦もザフトも。」

「決戦機に指定してしまっているからな。変えられんのだろうさ。」

「全機に通達。全機、クールよりホットに移行。C装備にて待機。」

「オペレーター、オペレーションアナウンスを開始せよ。」

「「「了解」」」」

「オペレーターより全機へアナウンス。先行偵察部隊、ならびに航空班の情報より敵部隊の接近が判明。敵はMSジン25機、歩兵1個大隊、攻撃ヘリ1個中隊です。ヘリに関しては会敵までに戦闘機で撃墜可能です。会敵予想は1時間後。サガミ三佐の指示に従い、迎撃してください。」

「聞いたな。各自、事前のシミュレーション通り行動せよ。この程度の敵、犠牲を出すなよ。」

1時間後、オペレーターの情報通り連邦軍のMS、歩兵と会敵。日本軍特殊戦車『久遠』12機は若干の小破機を除いて無傷でジン25機を撃破することに成功した。

それはとても新しい戦いで（後書き）

『久遠』武装

405ミリ機関銃。

赤外線誘導式ミサイル発射管×2

A装備（山岳・都市戦闘想定）

150ミリスナイパーライフル

煙幕弾頭

B装備（対艦戦闘想定）

270ミリスナイパーライフル

又は

レールキャノン（口径未設定）

C装備（対MS戦闘想定）

ビームサーベル（刃渡り10メートル）

高熱溶解ナイフ…メルトシミター（刃渡り3メートル）

…突っ込むところは多いかもしれませんが、ご勘弁ください。
ご意見・感想募集中です。

それはとても確実な未来で

破竹の進撃で中央アジアを併吞していく地球連合軍。その勢いはとどまることを知らず、すでにいくつもの都市とレアメタル鉱山を制圧していた。その膨大な利権を何とか得ようとロゴス内外の企業が蠢いており、いつの間にか地球連合最大の企業に急速成長していたアズラエル財閥もその例外ではなかった。今日の競売で勝とうが負けようが明日もまたいずれかの利権が競りだされるわけであり、で、何が言いたいかと言うと：

「…何であれだけ秘書を増員したのに以前より仕事があるんでしょうね…。」

「仕方ありません。今回の利権分けに関しては、ロゴス盟主として競売の管理をし、アズラエル財閥総帥として競売で勝ち取った利権を管理しなければいけませんから。」

「どうりで似たような書類を複数回見ていると思いました。しかしあれですね。このムルタ・アズラエル邸、新しく改築しなおしたらついに地球連合事務局ビルより高くなりましたね。おかしいですよ、個人の邸宅が地球最大の公機関の建物より大きいっていうのは。」

「アズラエル財閥総帥とロゴス盟主、さらにブルーコスモス盟主の権力を足したらたぶん宇宙最大の権力者といえるかもしれませんよ。ロゴス盟主以外の役職に任期はありませんし。この邸宅だって、アズラエル様のプライベートの部屋より圧倒的に執務室と倉庫のほうが大きいじゃないですか。引越したときに招いたサザーランド大佐やアルスター議員の顔も引きつってましたよ。」

「あれは見ものでしたね。その後の『アズラエル様の仕事中毒はついにここまで…』とか『やはりフレイと結婚させて家庭の楽しみを教えなくては』とかは余分でしたが。仕事増えてるの私のせいでは

ありませんし。ん？」

「アズラエル様、サザーランド大佐より至急の通信が着ておりますが。」

「つなげてください。…どうしました、サザーランド大佐。まさかカザフステップにサイクロプスが仕掛けられていたとかじゃないですよね。」

「…そんな恐ろしいことを想像させないでください。アズラエル様、先ほど手に入れた情報なのですが、日本軍のMSが地球連邦のジンを半分の戦力で撃破したそうです。」

「そうですか。しかしその技術に関しては恐らく生半可なことじゃ手に入られませんよ。日本が独立を維持できているのはその技術力によるものが大きいですからね。…しかし、地球連邦、特に東アジア共和国の動きが心配ですね。」

「技術力奪取のために日本に牙を向ける、と？しかしアズラエル様、地球連邦軍は全体的にこれ以上の戦線の拡大を行う余力は残っていないと思うのですが…。」

「地球連邦のみならず、ですよ。ザフトの戦略はアルザツヘルにある発電所の制圧だけではありません。彼らは地球連合内のマスドライバー施設全てを制圧ないしは破壊し、月を干すことも考えています。いつ地球連合よりになってしまいか分からない中立国のマスドライバーを残しておくとも考えにくいです。日本のマツヤマ宇宙センタ―にあるマスドライバー施設破壊を名目に、地球連邦の侵攻を援助する可能性もあります。」

「なるほど…。参謀本部でも提言してみます。ですがザフト地上軍の最初の目標は…。」

「決まっています。ヴィクトリアです。」

それはとても確実な未来で（後書き）

話のネタは、ある。しかし、サブタイトルの語彙がつきかけている！ということに気づきました。

ご意見・感想募集中です。

それはとても意外な形で（前書き）

今回ちょっと短いです。

それはとても意外な形で

地球連合軍と地球連邦軍がユーラシア大陸の覇権をかけて激闘し、アフリカではザフト地上軍と地球連邦軍が連携して地球連合軍からサハラ砂漠からナイル川沿岸にかけての支配権を奪わんと激戦を繰り返していたその頃、プラントにてザフト宇宙艦隊は順調にかつての戦力を取り戻しつつあった…訳ではなかった。

開戦当初に農業用プラントが失われ、食糧事情が悪化したプラントであったが、地球連邦と同盟を結び、地球連合軍の宇宙艦隊を撃滅一步手前まで追い込んだことで地球から食料などの民生品を輸入可能になり、ここしばらくは市民の生活レベルも戦前の8割ほどに回復しつつあった。しかし地球連合軍宇宙艦隊はプラントには無いその高い生産力を生かすことで戦力を急速に回復し、通商破壊作戦を行うことでここ1ヶ月の間プラントの食糧事情を悪化させ続けていた。食料を始めとして嗜好品や民生品の多くが配給制となり、好調な戦局と市民生活レベルのギャップに多くの国民が疑問を抱いていた。

そんなある日、プラント大手の報道企業に匿名でザフト地上軍が地上で食べきれないほどの食事を摂取しているという情報が寄せられ、プラント内で大きな反響を呼んだ。政府がひた隠しにしてきたザフトの護送能力の低さが露呈してしまったのだ。しかも間が悪いことに評議会議員の1人が地球からたどり着いた数少ない輸送船に積みれていた嗜好品を横領していたことまで暴かれてしまった。最高評議会は国民の信頼を取り戻すために再編途中の宇宙艦隊を護送任務に就かせなければならなかった。

「…本気で言っているのか、シーゲル。」

「本気だ。パトリック、直ちにザフト宇宙艦隊の全力をもってして輸送艦隊の護衛をしてくれ。これは最高評議会の決定でもあり、国民の意思でもある。」

「まだ再編成中なのは知っているだろう。パイロットやクルーの大半も兵学校を繰り上げ卒業させたばかりのひよっこだ。…あと2ヶ月、いや、1ヶ月待ってくれ。」

「それは無理だ。国民の不満はだいぶ高まっている。すぐにでも行動を示さないとまずい。…地球連邦から輸入し始めたときに配給制度をやめていなければ1ヶ月我慢できたかもしれないが、1度生活が良くなってしまおうと水準を下げることはできんだ。頼む、分かってくれ。」

「…1度や2度なら可能だが、継続しての護送などできんぞ。総力を上げるのも無理だ。せいぜい精鋭部隊をまわすぐらいだろう。それならばできないことは無いが…。」

「すまない、頼んだぞ。」

「ウロボロスを早く完了させて宇宙からナチュラルどもを早く追い出さねばいかん。ヴィクトリアの作戦を急がせるぞ。」

「仕方が無い…か。分かった、議員にはこちらから説得しておく。」

ブルーコスモス諜報班の暗躍は意外な形で成果を現そうとしていた。

それはとても意外な形で（後書き）

眠い…。

ご意見・感想募集中です。

それはとても儂い休暇で

光あるところに闇があり、秩序の裏に混沌があるように、アズラエルの権勢が増せば増すほど徐々にだが、それに反発する者の蠢動も大きくなっていった。そもそもブルークコスモスはもともと一財閥が設立した慈善団体でしかなく、その恩を受けてアズラエルに憧憬の念を抱いている人物を含めてもあまり人数は多くない。政界や軍にいるブルークコスモス派も、アズラエルの持つ権力に危機感を全く持っていない人物は少数派であった。ロード・ジブリールを始めとする反アズラエル派は迷いを持ちだしたブルークコスモス派に接近し、少しずつ、少しずつ組織の規模拡大を図っていた。そんなある日、ザフトにて情報提供を行っていたラウ・ル・クルーゼ自らが輸送船護衛任務に就くという情報をジブリールは手に入れた。

「これはチャンスですよ、皆さん。是非とも盟主様にご出陣していただき、とつとと退場してもらいましょう。」

「馬鹿なことを言うでない。あれだけの力を持っているやつがそうそう前線に何ぞ出れるわけが無いではないか。だいたい、チャンスも何も今やつが死んで、スムーズにわしらに椅子が廻ってこれると思えん。根回しも終わっていないし、味方する議員も少なすぎじゃ。」

「そんなこと言っているからいつまでもアズラエルなんかに負けているんです。いいですか、勝負には潮時というものがあるんです。ここでやらなきゃいつまたこんなチャンスが来るか分かったもんじやありません。根回しだって彼の派閥の議員だって核となっているアズラエルが死ねば烏合の衆でしかありません。いくらでもこちらに取り込めます。ああもう、そんなくだらないこと聞いている暇があったら皆さん早く議会やら軍やらに働きかけてくださいよ。とろと

ろしてはいられないんですから。」

「：分かった。ではおぬしの言うとおりにしてみよう。：やれるのだな？」

「やれるかじゃなくって、やるんですよ。まあ実際に殺すのはクルーですが。彼だって伊達に勲章を持ってるわけじゃないでしょう。」

月 地球連合軍プロレマイオス基地

「…………なぜこうなった。」

地上の各戦線が膠着し、舞い込んで来る書類の数が減って仕事の合間にお茶をしたりたまの休日にたまたまJOSH-Aに現在勤めている思い人とお忍びでお茶をしたりと、ようやく自分の時間というものを持てるようになったと思ったら、いつの間にか新たな仕事が用意されていた。

曰く、

「地球連合軍名誉少将として第8艦隊と特殊教導部隊を率いてザフト輸送船団を撃滅せよ。」

何で僕がただの通商破壊任務なんてしなきゃいけないんだ、そもそも僕は軍人じゃあない、と文句を言ったのだがハルバートン提督は「地上任務だけではなく宇宙戦でも箔付けをしてもらおうと思ってな。それに：ザフトも最近の輸送船の被害にそろそろ重い腰を上げざるを得ないはずだ。」

とか言っていた。箔付けをしたがる上層部の思惑は分かる。膠着した状況の中で国民に戦意高揚となる情報を与えたいのだろう。だけど、僕の仕事を代わりに引き受けてくれるやつがないのに勝手に仕事を増やさないでほしい。

それはとても長い休暇で（後書き）

次の次くらいには原作に突入させます。次話でもう一人原作キャラと接触してもらうので…。
ご意見・感想募集中です。

それはとても名譽なことで（前書き）

今回は長いです。全ては次話で原作突入するために！

それはとても名誉なこと

「それで、艦隊司令官殿である名誉少将様がいったいどんな話をするって言うんで？」

第8艦隊旗艦というより、通商破壊任務指揮艦であるメネラオスのMA発着所にてアズラエルに対してその人物はふてぶてしそうに言った。

「やめてくださいよ。私は軍人なんて柄じゃないんですから、エンデュミオンの鷹殿。」

「…、分かった。で、アズラエル殿が俺に何か用でも？と、いうより教導任務についていた俺が何でひよっこ共ともどもこんな任務に就かされたのか謎なんだけど、どういうことだ？」

「ええ、あなたのガンバレルの、といよりも空間認識能力を生かしてあることをしてもらいたいんですよ。あなたの教え子については本当に観戦してもらっただけなんです。…。メビウス・ゼロは有線式のガンバレルを操って他方向からの同時攻撃を可能とする画期的機体なんです、いい加減性能が旧式化しているといわざるを得ません。ですので、新たに無線誘導タイプの子機を使った機体を使っていたきたいのです。」

「無線誘導？ Nジャマーの影響で不可能になった研究ジャンルだったろ、それ。ヴァルキュリアもハルピュイアも結局CPUによる完全自立型だから無人になっただけで、遠隔操作じゃないんだろ？ どうやって動かすんだよ、その新型機体は。」

「基本的には既存のハルピュイア自体を子機としてもらいます。です。で操作系統もガンバレルと違ってほとんど子機のCPUでまかなえます。で、あなたには大まかな指示を子機に対して送ることで連携した攻撃をしてみらおうと思っています。Nジャマーも長距離誘導は不可能となりましたが、中長距離の単純な通信なら可能です。ようはノイズですからね。とはいえ、ガンバレルより格段に行動範

囲は伸びますし、誘導は難しいかもしれませんが操作が楽になった分子機の数も増やせます。どうです？」

「ああー。まあ、それなら可能だわな。俺ももうちょっとガンバレルの数増やしたいと思ってたからそれはありがたいんだけど、だかなぜそこまで俺にこだわるんだ？言っちゃ悪いが、メビウス・ゼロを使ってるやつはかなり少ないはずだ。特にグリマルディでだいぶ減っちゃったからな…。それで、なんでメビウス・ゼロの発展機を作ろうとしてるんだ？それだったらハルピュアの後継機とかMSとかを作るほうが先だろう。なぜだ？何を連合軍は考えている？」

「…鋭いですね。あなたも薄々気づいていると思いますが、今連合ではG計画というMS開発プロジェクトが進行しています。計画の終了は3ヵ月後となっていますが、困ったことにOSは戦闘記録を元に改良を続けなければ貧弱すぎるレベルと言えるでしょう。そこで、あなたに護衛機として新造艦に配属しパイロット、というよりも戦闘記録とOSを守ってもらいたいのです。」

「なるほどな。だがOSはどのぐらいのレベルなんだ？今は訓練だからジンのOSを転用しているが、もう少しましなレベルにはなるんだろう。」

「あまり期待はしないでください。機動戦は夢のまた夢になりそうだとはおきます。」

「…マジかよ。分かった、3ヶ月以内にその新型機に慣れりゃいいんだな？」

「お願いします。」

「レーダーに反応！カオシユン発の輸送艦とその護衛艦隊だと思います。数は恐らく20です！」

「20？若干多いような気もしますが…。まあいいです、砲戦可能距離までどのくらいですか？」

「恐らく20分くらいでしょう。MAを出しますか？」

「護衛艦隊は5隻ほどですよ。とするとMSは30機。やめときましょう、落とされるのがおちです。だったらせつかく艦数で勝ってるんですからアウトレンジから一気に攻撃してやりましょう。」

「…なるほど。全艦に通達！砲戦準備に移れ。その後にMAを出す。」

「了解、全艦に通達。砲戦準備に移れ、その後にMAを出す。」

「敵護衛艦隊、MSを射出しました。数、45です。」

「多いな。やつら、さては輸送艦にも無理やりMSを積んだな。」

「敵艦、MS射程圏内に入りました！射線上にいるMSの影響で敵艦は砲撃してきません。」

「よし。アズラエル少将、指示を！」

「分かりました。全艦、砲撃開始！5斉射後にMAを出せ！」

練度の高い第8艦隊の砲撃ということもあり、5斉射でMS8、ナスカ級1、輸送艦3隻を撃破することに成功し、他の艦にも多かれ少なかれダメージを与えることには成功した。しかし、やはりMSとMAの戦闘ともなると形勢は不利となり、無人MAを多数投入する物量策をもってしてもなかなか敵にダメージを与えることはできなかった。

「MA損耗率30パーセントを突破！」

「アズラエル少将、敵はどうやらかなりの精鋭だったようです。このままでは敵MSを艦隊まで許してしまいます。」

「分かっています。ですが、もう少し待ってください。こちらもただやられるに任せているわけではないのです。」

「そうでしたな。しかし、間に合うのでしょうか。」

「少将！MSの内1機が突破してきました、恐らく指揮官機です！5分で防空射程距離内に入ってしまうです！」

「何！？直掩のメビウス50機を全て出せ！何としても防空射程圏外で食い止める！」

その頃、MS指揮官機に乗っているザフト軍隊長、ラウ・ル・クルーゼは状況に危機感を抱いていた。

（おかしい、確かにヤツの気配を感じはするのだが、どこにいる？それともまだ艦内にいるのか？いや、それはない。ではいったいどこだ？どこにいるのだ、フラガ！）

「くっ、弾切れか。初戦の砲撃でMSを失っていなければ突破できたものを！む？…ふっ、どこまでも手の内で踊らされていたということか。ムルタ・アズラエル、私は貴様を甘く見すぎていたようだな。」

戦闘中に旗艦ヴェサリウスから届いたレーザー通信を見たクルーゼはそうつぶやくと、全MSに撤退するよう信号を上げるように旗艦に通信を送り、自らも撤退した。

「フラガ大尉よりレーザー通信！『ワレ奇襲攻撃ニ成功セリ。輸送艦12隻、ローラシア級2隻ヲ大破ニス。』敵艦隊旗艦の撤退信号

を確認。敵MS、後退しています！」

「よし、MA隊にも後退するよう伝えろ。深追いすれば思わぬ反撃を食らいそうだ。：やれやれ、何とか勝利できましたがあの指揮官機は化け物のようでしたな。まさか1機で有人MA21機を倒すとは：。」

「ええ、結構危なかったですし、損害も想定以上ですね。：今回のように毎回毎回通商破壊に1個艦隊丸々出すわけにもいきませんし、やはり完全に物流を遮断することはできませんね。」

「ですが、たしかまだザフトの宇宙艦隊は回復しきっていなかったはず。この戦いの損害はザフトを苦しめるでしょうな。」

こうしてムルタ・アズラエルはジブリールらの陰謀に打ち勝ち、地球連合の英雄としてまた1個階級を上げられてしまうのだった。だが、地球に戻ってきて彼が1番に見る事となるのは賞賛の目で自分を見るマスコミ達ではなく、複数の秘書官たちが運んできた2週間分の報告書であった。

それはとても名誉なことだ（後書き）

2話分ですので長いです。読めば分かったと思いますが、本当はあそこで切る予定だったのです。ですが、無理矢理結びました。次こそは原作入りです。そしてアズラエルの思い人が明かされる時！次の投稿までに感想にてこの思い人の正体を予想し、正解した方にはルシアンがあなたの要望する武装を連邦もしくは日本のMSに付けちゃいます。是非書きちゃってください。（ちなみに連合のMSでもいいですが、量産型は1番目はダガーで決定しているのであまり突飛な武装は搭載できません）

ご意見・感想募集中です。

それはとても強力な兵器で（前書き）

原作突入ゝ

それはとても強力な兵器で

「本当に次こそは大丈夫なんでしょうね？ 前回の二の舞だなんてことはごめんですよ、僕は。」

「フッ、前は情報が誤っていたからな。今回はこちらで掴んだ情報だ。失敗などありえんよ。」

「…そうですか。じゃあ僕はせいぜい吉報を待っていますよ。では、青き清浄なる世界のために。」

「…。」

CE71年1月25日　ヘリオポリス　オーブ軍港

通常であればオーブ軍仕官がいるはずの指揮官室には、オーブ軍の制服を着つつも、地球連邦軍の階級章を付けている軍人たちと、スーツを着ている長身の好青年が立っていた。

「…：ではOSの方も順調に改良されているということですか。」

「ええ、現地の工業大学生に秘密裏に協力してもらっているということです。恐ろしいスピードでシステムが構築されています。カトウ教授とやらは恐ろしい才を持つ生徒を持っているようです。」

「ふむ…。OSの内容がばれていないのでしたら問題は無いです。」

確かパイロットの方も今日来るはずですからその人たちとも連携して最適なOSを模索してください。後、防諜の方はしっかりやっといってくださいよ。皮肉なことですが、より優秀なはずのコーディネイターよりも性能の良いOSを我々は作っているのですから。」

「はははっ、まったくですな。お任せを、防諜には最大限注意を払っております。」

「お願いしますよ。…じゃあ僕は噂の新造艦を見ようと思うんだが、

君たちはパイロットたちを迎えにいくんだったな。誰か案内のできるものはいませんか。」

「そうですね…。CIC担当なら今手は空いているはず…。…バジール少尉！ちよつとアズラエル氏の案内をしてくれ！」

「はっ。それでは案内をいたしますので、こちらにおいでください。」

軍港内の指揮官と思われる人物からの命令を聞き、それまで書類仕事をしていた女性仕官がアズラエルの元によりドックへと案内した。

あまり人の通らない連絡通路に入ると、二人の間から公としての空気が薄れていった。

「しかし驚きましたよ。まさかJOSH-Aに勤めていたはずの人物が急に新造艦に乗り組むことになるとは。いったいどうしたんです。」

「私にもこういうことはあまり分かりませんが、アズラエルさんが中將になってしばらくたったぐらいの頃に人事課から通達が…。」

「そうですか、人事課の人からは何か言われませんでしたか？参謀本部からの意見だとか、議員からの圧力だとか、第8艦隊からの要請だとか。」

「は？…いえ、そのようなことは何も。私はてっきりアズラエルさんからの圧力かとも思ったのですが…。」

「まさか。私でしたら船ではなく私の執務室に配属させていますよ。知っていますか？今私の部屋には地球連合事務局から5名、ロゴス総務班から5名、地球連合軍総務課から5名、大西洋連邦国務省から10名、ブルーコスモス事務課から5名の事務官の応援が来ていて、それでも秘書が足りないんですよ。」

「それは…。仕事量が多いことも分かりますが、まるでかつての国際連合の総会のようなですね。」

「笑い事じゃありませんよ。だから私はあなたに個人的な思いからだけでなく、切実に秘書になってほしいんです。後、アズラエルさんではなくムルタ、と呼んで欲しいんですが…。」

「無理です。これでも譲歩しているんです。普通ならばアズラエル中將と呼んでいるはずなんですから。後、秘書のお誘いに関しても難しいです。兄が生きていればうなずいたかもしれませんが…。」

「そうですね、無理を言ってすみません。ところで、新造艦『アーケンジェル』の案内をしてもらいたいのですが…。」

「分かりました。すでに連絡橋を通って艦内に入っているのですが、現在は船員室とブリッジをつないでいる連絡路を通っています。この先、ブリッジにてこの艦の火器類全てをコントロールしています。艦載機としてはMS5機に加えてMAを最大で5機搭載可能です。MAに関してはッ！」

ズンッ！ズズッ！！…ヴィー！ヴィー！ヴィー！

『非常事態発生、非常事態発生！ザフト戦闘艦ならびにMSが複数出現。各員、非常事態マニュアルNo.3に従って行動せよ。繰り返し…』

「バカな！中立国のコロニーに攻撃を仕掛けるだっ！？やつらは何を考えているんだ！？」

「恐らくこの開発がばれたのでしょう。…まずいですね、地球連合軍が管理していることをばれなくするためにこのMAはオーブ軍採用の有人機しかないはず…。ナタル、ブリッジに向かい司令部と連絡を取りましょう！」

「そ、そうだな。…おい！誰かいなか！？」

「バ、バジール少尉！よかった、生きておられましたか！」

「どういことだノイマン？艦長達は無事か？」

「いえ、どうやらパイロット候補生たちを迎えに行ったところでちやうど襲撃されたらしく、艦長以下多くの仕官が生死不明です。ですので現在この場で最高階級なのはバジール少尉です。」

「くっ、仕方が無い。CIC、引き続き連絡の取れていない乗組員の情報収集に当たれ！機関長！アークエンジェルが始動までどのくらいかかりそうだ!？」

「1時間ほどうす！少尉、そちらの方は？」

「彼は「私はムルタ・アズラエルです。ちやうどこの艦とGの視察に来ていたところ、巻き込まれたわけですが…。そうだ、バジール少尉、Gの確認は？」

「Gは…確かモルゲンレーテ社の別のドックにあったはずです。はっ！おい、だれかすぐにGの格納庫に連絡を取れ。敵の狙いはGの奪取かもしれん。」

「少尉！敵にGを奪取されたようです。…あ、いえ、1機は奪われていないようです！コロニー内で戦闘を行っています。あ、後、通信が入っています。」

「入れろ。」

『こちら、特殊教導部隊のフラガ大尉だ。敵MS1機を落としたが、こちらも被弾ししまった。着陸許可を出して欲しい。』

「アークエンジェル、バジール少尉です。現在艦長以下仕官の大半がいなので臨時で許可を出します。それと大尉、戦闘中の味方MSの支援をお願いしたいのですが。」

『了解。それぐらいなら今すぐにもできそうだ…って何だ!？』
「っ!？」

突如、激しく揺れるコロニー。ストライク操縦者キラ・ヤマトが対艦用兵器アグニを使用した瞬間であった。

それはとても強力な兵器で（後書き）

というわけで、原作突入なのです。え？何でアズラエルがいるのか？私には書類仕事だけでお話を終わらせる技量なんて無いからです。しょうがないでしょう。

後、あんなバレバレな質問に答えてくださったSpencer様。ありがとうございます。ルシアンは皆さんがこの小説にどのくらい関心を持っていたか不安になってしまい、思わずあんなイベントをやってしまった。これからも末永くお付き合いをよろしく願います。後、戦略兵器なのですが、しばらくアズラエルが地球に戻れないので作れません。すみません。ジブリールは作ろうとはするでしょうが、アズラエルの作った技術を嫌いそうなので、切羽詰らない限りできないでしょう。

ru様、あなたの応援は私の支えです。数字が増えることでも呼んで下さる方がいることが分かり、嬉しいですがやはり感想などが書かれていると嬉しさもひとしおです。これからもよろしく願います。

ご意見・感想募集中です。ありがとうございます！

それはとても予想外な人物で

『アグニ』射撃後の混乱でザフト軍強襲部隊は一時的に後退し、アークエンジェル艦内では情報の整理が行われつつあった。

「コロニーの構造に深刻なダメージが加わっています。恐らく早急に応急処置を施しても1日持たないかと…。」

「司令部スタッフ及び艦内の仕官の大半の死亡を確認しました。引き続き調査を継続しますが、あまり期待は持てません。」

「フラガ大尉より通信です。これより帰投する。確認した友軍Gもこちらに向かわせた。だそうです。」

「そうか、ご苦労。：アズラエルさん、ザフトの攻勢は続くでしょうか。」

「そうですね、恐らく逃したG1機を確保または破壊するまでは攻撃してくると思いますよ。しかし：G計画の防諜にはかなり力を注いでいましたから、諜報力で圧倒的に弱いはずのザフトが察知できるとは思いません。最悪…。」

「内部からの手引き：ですか。信じたくは無いですが。」

「バジール少尉！フラガ大尉のメビウス・ゼロが着艦しました。Gの方からも着艦要請が来ていますが。」

「分かった、Gにも許可を出せ。それと一応パイロットの確認ができていないのだから保安班から何人か着てくれ。私も行く。」

「はっ！」

「私はここで待っています。会議をするのでしたらこちらにつれてきてください。」

30分後、ブリッジに戻ってきたバジール少尉が連れてきたのは

地球連合軍の軍服を着た男女二人であった。

「一応揃ったってなら自己紹介をしようか。俺はムウ・ラ・フラガ。地球連合軍特殊教導部隊の大尉だ。といっても、ひよっこどもはみんな死んじまったけどな。」

「あなたが：！エンデュミオンの鷹って呼ばれていますよね、私も聞いたことがあります。あ、申し遅れました。私地球連合軍第8艦隊所属、マリュー・ラミアス大尉と申します。アークエンジェル副長として先日配属されました。」

「ナタル・バジール少尉です。ラミアス大尉と同じく、先日アークエンジェルCIC担当として配属されました。それから：」

「ああ、私はムルタ・アズラエルと言います。今回は視察ということで来ていたんですが、巻き込まれてしまったようです。」

アズラエルの発言を聞くとフラガ大尉は「あちゃあ：。どっかで見たことあると思ったわけだ。」と言い、ラミアス大尉は突然の大物の出現に呆然としていた。

「ま、私のことはさて置くとして：。この艦の責任者はどうするんですか。逃げるにせよ戦うにせよ責任者は必要でしょう。」

「はっ！そうだ、艦長達はどうなさったんですか、バジール少尉。」

「艦長、いえアークエンジェル内の仕官の大半は先の襲撃で戦死なさいました。確認できている限りでは士官はここに人だけです。」

「そんな：。」

「あちゃあ。ってことは、司令部のほうもだめだったのね。」

「はい。司令部のほうは特に念入りに攻撃されたようで、スタッフで生き残った方はみつかっておりません。」

「んー、じゃあこの中で最高階級の人が艦長代理ってことか：。」

「フラガ大尉ですか？」

「まさか。もっとずっと偉い方がそこにいらっしゃるじゃないですか。アズラエル中・将・殿。」

「やめてくださいよ。私は名誉中將であって士官学校を出たわけじゃないんですから。」

「しかし、常に数百人の部下を直接指揮して執務を行っていると言います。それこそ今ここで必要な能力ではないでしょうか。」

「…ラミアス大尉ではダメなんですか？ 私はアークエンジェルのこととは詳しくないんですが。」

「い、いえ。私なんでもともと技術将校ですから指揮なんてしたこともありませんし…。あの、艦の構造や武装については自信があるので私が副長で、中將が艦長ということではどうでしょう。」

「…仕方ありませんね。ではラミアス大尉、バジール少尉、とりあえず武装についてだけでも今すぐに教えてください。最低限それぐらい知らなければ指揮なんてできません。それからフラガ大尉。」

「あ？ 俺？」

「ええ、確かこの艦には以前お話した新鋭機の『アエロー』が格納庫にあるはずです。一緒に搭載した5機のハルピュイアも指揮できるようにになっているはずなので、受領して一度チェックをしておいて下さい。」

「了解。ようやく新鋭機に乗れるってか。」

こうしてアズラエルというイレギュラーを加えつつ物語は進みだしたのだった。

それはとても予想外な人物で（後書き）

少し動きが遅いですね。次回からもう少し早く進むはずですよ。

ご意見・感想募集中です。

5/21 納得がいかない、と言うよりも後の話が続かなくなりそうなので少し変更しました。一度読んでくれた方、申し訳ありません。

それはとても早い逃げ足で（前書き）

原作に突入するとなぜか1話あたりが長くなる。なぜ？

それはとても早い逃げ足で

「…ですから『ゴットフリート』のチャージが終わるまでが勝負かと。」

「ふむ…。おそらく敵も全力で攻撃してくるでしょうし、もう少し早くチャージできませんか？」

「難しいかと…。」

ひと通り自己紹介と作業分担を決め、士官は各自自分のやるべきことをすることとなった。

フラガ大尉はアエロー及びその子機となるハルピュイアのチェックヘ。ラミアス大尉は生き残ったクルーへの今後の方針の伝達とMSパイロットへの事情説明と協力要請へ。そして私とナタルはとりあえずの直近的危機状態を乗り越えるための作戦会議を行っていた。

現在アークエンジェルはドック内におり、しかも出入り口がコロニーの崩壊の危機を察知したコンピューターの命令で閉じられてしまっている。このままではアークエンジェルまでコロニーの崩壊に巻き込まれてしまうのでアークエンジェルの主砲『ゴットフリート』で隔壁を吹っ飛ばして脱出するしかないのだが、問題は始動したばかりのアークエンジェルでは主砲を使えるようになるまで時間がかかるという所だ。ザフトだって馬鹿ではないのだからこちらが逃げるまで攻撃してこないはずが無い。しかもこちらは半ば密閉空間に近いドック内にいるのであまり派手に反撃はできないのだ。

「やはり鍵はフラガ大尉とMSパイロットですね…。」
「…。」

シュンツ

そんな考えをしていたとき、唐突にブリッジ内に入ってくる人影があった。

「とにかく僕は、そんな脅迫じみたことを言われたって乗りませんから！責任者にまずは会わせて下さい！」

「そ、そんなこと言われても……。」

入ってきたのはラミアス大尉と年若い、見たところ民間人の少年であつた。

「どうしました、ラミアス大尉。」

「は、それが……この人が僕にMSに乗れって強要してくるんです！責任者に、いえ、艦長に会わせて下さい！何で僕が人殺しの道具に乗らなきゃいけないんですか！」

ラミアス大尉はおろおろしている。この分では強要という言葉には若干の語弊があるようだ。

「まあまずは落ち着いてください。わたしはまだ君が誰かすら知らないんですから……。バジール少尉、彼は？」

「はっ、彼、キラ・ヤマトはヘリオポリスの工業カレッジ生だそうで、先ほどの戦闘では偶然乗ったストライクで戦闘を行ってくれました。」

「バカな！Gはかなりの訓練を積んだ兵士でも満足な戦闘ができないものです。民間人に扱えるはずがありません。」

「彼はその、コーディネーターなので……。」

「なるほど……。ああ、申し遅れましたが私はムルタ・アズラエル。名誉中將で今はこの艦の臨時艦長を勤めています。……それで君はも

うMSのパイロットをしたくないと言うことでしたっけ？」

「そうです！僕はもうあんな、あんな…。」

「人殺しをしたくないと…。まあ、気持ちは分かりますよ。好きで人殺しをするような人間はそうはいませんし。ですが私たちも今君がいないとちょっと困ったことになってしまふのですよ。」

「知りません、そんなこと！とにかく、僕は人殺しをしようとは思いませんから！」

「そうですか…。では、お友達を助ける手伝いをしてもらいませんか？」

「え…？」

「ですから、あなたのカレッジでのお友達、名前は聞いてませんが、もこの艦には乗っているんですが、私たちだけではこの艦は守りきるの是非常に難しいのです。ですから、力を貸してほしいと。」

「そんな…。卑怯だ！あなたたちは結局僕の友達を利用しているだけじゃないですか！」

「ではこう考えたらどうです。『自分ひとりでは守れない友達を地球連合軍を利用してやることで助けるんだ。』とね。…同じことだと言いたそうですが、私たちが卑怯だろうとあなたがずる賢いのだろうと、結果が同じなら一緒です。考え方にこだわって友達を見殺しにすることほどあほらしい事は無いでしょう？…君のような年の子に言うことではありませんが、利用しなさい。大人であろうと、どんな組織であろうと。その上で自分の大切なものを守るのです。」「……。」

「軍に利用され続けるのがいやでしたら、この戦いが終わった後に私の社にでも来なさい。お友達を含めて平均よりは高い給料で雇ってあげますよ。…納得できたのならパイロットルームへ行きなさい。…フラガ大尉、聞こえますか？」

『ん？どうしたんだ？』

「今から行くパイロットにいろいろ教えてやってください。技術はあっても子供ですから、お忘れなく。」

『わかった。：そうだな、子供：か。』

ヤマトとの問答が終わって30分ほどすると、索敵をしていたトノムラ伍長からザフトのMSの接近を伝えられた。

「ザフトMS5機接近！奪取されたG4機に加え、シグー1です！」

「そんな、もう実戦に使用するなんて！」

「おそらく実戦を通じてのデータが欲しかったんでしょうが、落とされない自信を持てるほどの技量はあるようですね：。フラガ大尉とヤマト君を出してください。副長、チャージは後どのくらいですか？」

「あ、えと、もう後20分かかりません！」

「ふむ：5対2ですが、ヤマト君の技量とアエローの子機をフラガ大尉が有効に使えるかが鍵になりそうですね。」

戦闘ではかろうじて互角を維持し続け、ついにゴットフリートのチャージが完了。アークエンジェルは外部エネルギープラグを解放ち、ついに動き始めた。

「ゴットフリートで前面の隔壁を破壊してください。その後、最大船速で逃げます。両パイロットにはコロニー崩壊の危険性を通達してください。」

「了解。両名に通達後、ゴットフリートを使用します。オペレーター、急げ！：ラミアス大尉！」

「ええ、ゴットフリート照準、前面の隔壁へ：撃てえー！」

瞬間、轟音とともに隔壁は吹き飛び、コロニーの骨格部までもが歪

み始めた。

「機関最大！急いで！！」

「オペレーター、急いで両機を誘導収容しろ！」

こうして、まずは目前の危機からアークエンジェルは逃れたのだった。

それはとても早い逃げ足で（後書き）

質問がございまして、『憑依人間なんだからヘリオポリス襲撃を予期してなぜ対策を採らなかったの?』といった感じのものでした。お答えします。えー、1話あたりをお読みになるとたぶん分かると思います、主人公の前世は今私たちが生きている時代よりも10年ほど未来なのです。だから、ガンダムシリーズは続いているから知っているし、SEEDやSEED DESTINYも見たことはありますが、見たのは幼年期。だからほとんど覚えていないし、いっそ無知に近い状態です。と、言うわけで疑問にお答えできましたでしょうか? また疑問がありましたらお聞きください。

ご意見・感想募集中です。

それはとても滑稽な道化で（前書き）

遅れてすみません。大学のゼミの発表のために時間が取れませんでした。

それはとても滑稽な道化で

アズラエルらに乗せたアークエンジェルが無事ヘリオポリスから脱出し、最大船速で逃げ出していたその頃、地球連合軍にオーブ連合首長国経由でヘリオポリスの崩壊が伝わり、混乱状態に陥っていた。何せアズラエルが担っていた役職や権限は膨大すぎるものであり、しかもアズラエル本人が仕事の効率化のためにそれらの仕事を細かに連携させてしまっていたため、複数人での分担化さえも難しくなっていたのだ。連合軍上層部の人間はそのことをよく知っていたため、次なる生け贄をなかなか決められないでいた。だが、連絡の入って3日たったある日、欲にとらわれた英雄が現れた。

地球連合アラスカ本部 総会

「アズラエル氏の生死が不明な今、トップの不在は大規模な混乱を引き起こすのは確実じゃありませんか！ 僕たちは今こそ、憎きコーディネイター共から青き清浄なる空を取り戻さなければいけないんです！ ロゴスの次期盟主は僕がやるべきです。」

「…。」

「ジブリール殿万歳！」

「青き清浄なる空のためにつ！」

「…。」

「…。」

地球連合全加盟国が参加しているこの総会では、ロード・ジブリールが熱弁を振るい、それに対して事前に手を回しておいた議員からの反応もちらほらと見られた。しかしその数は決して多いとはいえず、されど対抗馬となろうとする酔狂な人物も見られなかった。

「…では皆さん、ジブリール財閥のロード・ジブリール総帥がロゴ

スの臨時盟主でよろしいでしょうか。」

「…。」

「…。」

「…特に反対意見も無いようなので、臨時盟主はロード・ジブリール氏とします。次に、今年度の戦略目標ですが、特に問題が無ければ戦力の拡充に注力し戦線を広げないようにするという前年度に決めた方針を遵守しようと思いますが。」

「東ロシアのベーリング方面への軍配備が増えつつあります。参謀本部としてはアラスカ防衛以外にも連邦の日本侵攻が気がかかります。」

「サザーランド大佐の言うとおりです。もし連邦が我々のG計画に感づいたら焦って技術を得るために日本へ攻撃を仕掛けるでしょう。…勝てるかどうかは別問題ですが。」

「…では海峡付近の艦隊とシベリア方面軍を増やしましょう。以上でよろしいでしょうか。」

「本気でそんなこと言っちゃってるんですか？」

会議が終わろうとしたとき、ジブリールは悠然と馬鹿にしたように各国の政府及び軍関係者に対して言い放った。

「…どうということだね、ジブリール臨時盟主。」

「発言はできれば許可を得てからしていただきたいのですが。」

当然、周囲の彼に対する視線は厳しいものとなる。だが彼はその視線を無視して言った。

「私たちは一刻も早くこの清浄なる大地から害虫どもを駆逐しなければいけないですよ。何を悠長なことを言っているんですか。攻勢に出るべきじゃありませんか。」

「攻勢に出るにしてもまとまった戦力があるのだ。やつらを甘く見

た結果が現状なのだ。無理な攻勢は取れん。大体、我々は宗教家ではないのだ。人種的偏見を公の場で言わないでくれ。」

ジブリールのあまりに浅はかと言える発言を一笑し、大西洋連邦の軍人が不愉快そうに彼の差別的発言の撤回を求めた。

「それはただ臆病なだけです。私は考えも無く言っているわけはありません。今こそ、スエズを奪回し、あの空のバケモノどもを海に蹴落とすときなんです!!」

そう言って計画案をモニターに映し出していくジブリール。彼は名声を得て、その役職から「臨時」の字を取るためにも軍事的な成功を必要としていたのだった。

それはとても滑稽な道化で（後書き）

次話と繋げるべきか迷いましたが、切りました。
ご意見・感想募集中です。

5／29 誤字修正。自律人形様、ありがとうございました。

それはとても無様な敗北で（前書き）

いろいろ考えることがあり、他大学の非常に頼りになる先輩と人脈を持ったこともあり、大学でのこれからの方針を決定することができました。これからは更に忙しくなるので、更新は完全に不定期となるかもしれません。止める気はありませんが、皆様にご理解していただきたいと思います。

それはとても無様な敗北で

ジブリールが画面に映し出した地図。そこにはアラビア半島から南アフリカにかけての軍事拠点と駐在部隊をあらわした図が示されていた。

「皆さんが無理だ無理だと言っているのはココ、スエズ運河の対岸からしか攻勢をかけないことを前提としているからです。僕は皆さんが何でそんなことを考えるのか全く理解できません。兵隊がいないのなら他の場所からも集めればいいじゃないですか。この、たくさん兵隊さんがいるビクトリアから！」

そう言ってジブリールは地図で表示される範囲でもっとも多くの防衛部隊を有している拠点、ビクトリア宇宙港を指した。

「バカな！ビクトリア宇宙港はアフリカで最も重要な拠点ではないか！その防御を疎かにするなんぞありえん！！」

「攻撃は最大の防御、ですよ。戦場で遊兵を作るなんて愚の骨頂じやあないですか。攻めるのに防御なんていりません。要は勝てばいいんです。」

「どこに勝てる確証なんぞあると言うんだ！勝てると決まってもいないのに後に備えないのはおろかだぞ。！」

「フッフ、ハーハッハッハ！」

「何がおかしい！気でも狂ったか。」

「あなた達はいつから敗北主義者となったのですか。ビクトリアの守備隊は最新鋭のリニアガンタンクを装備し、しかもそれと同時にスエズ運河を渡るんです。どこに負ける要素があるっていうんですか！…アズラエル盟主はあなた達大西洋連邦軍をずいぶん弱体化させたようですね。ユーラシアさんはこの案に賛成のようですよ。」

「な、何？。」

「さあ、薄汚いコーディネイター共に地球の所有者が誰であるかをわからせてやりましょう！青き清浄なる空のために！！」

CE71年1月29日 アフリカ ザフト軍スエズ基地所属戦艦「レセップス」艦内

「バルトフェルド隊長！連合軍に動きが見られます。先日動き出したビクトリア駐留軍に加えて、対岸の部隊にも動きが見られます。ご命令を！」

「思ったとおりだったね、ダコスタ君。挟み撃ちは悪くないんだけど、敵に丸分かりじゃ意味無いよね。ふむ…、ダコスタ君、君部隊の指揮をやってみる気はない？」

「自分がですか？まあできなくはないですけど…。」

「よし、じゃあダコスタ君にザウトとディンの部隊半分をあげるから、対岸の敵を足止めしといてくれ。僕がもう半分のディンとバクウの部隊をレセップスと一緒に連れてって南の敵を撃破するから、

それまでは耐えてね。」

「は、了解いたしました。では早速準備の方を…」

「うん、それは頼んだから。…いこうか、アイシヤ。」

「ええ、そうね。ふふ、浅はかな計略だけで虎に齒向かうとどうなるかを教えてあげましょ。」

「そうだな。」

それからの戦闘で特筆できるようなことはあまり無かった。ビクトリアから移動した部隊は、航空戦においてはディンと何とか互角の戦いをできたが、機動力が大きく損なわれる砂漠戦を強いられたリニアガンタンクの部隊はバクウにいいようにあしらわれ、そこに更に出現したレセップスの艦砲射撃まで加えられては、地球連合軍に勝てるはずが無かった。

そして、ビクトリアからの援軍を失ったスエズ方面からの地球連合軍もあまり戦局を好転させられず、南方の戦闘から戻ってきたバルトフェルド率いる本隊の援軍を受けたザフト軍相手に敗北を喫することとなった。

「敗北ですな、ジブリール殿。…全部隊に連絡。後退せよ！」

「そんな…。バカな…。こんなはずでは！」

「ジブリール殿！そろそろここも危険です！お下がってください！」

「ありえない！なぜこんなことに！」

「ジブリール殿！！…チツ、しょうがない。失礼しますよ！」
ゴッ！！

「ガッ！！」

護衛の兵士によって気絶させられたジブリールは後方へと運ばれていった。すでに崩壊しつつある前線は司令部から5キロほどにまで迫っており、司令部要員は大慌てで撤退準備を進めていた。

地球連合軍による攻勢転移は完全に失敗することになった。

それはとても無様な敗北で（後書き）

ジブリール…。

ご意見・感想募集中です！

それはとても意外なことで

「…ふむ、では3日以内に何らかの形で補給を受けなければならぬ
いと言うことですか。」

「はい…。なにぶん急な出港だったので物資をほとんど積み込めま
せんでした。」

「まあ仕方ないでしょう。予定通りであつたならばそもそも私はこ
の席に座っていませんよ。」

ヘリオポリスからクルーゼ隊の追撃を振り切り、サーモレーダーや
重力波探知機に映らないよう低速で航行していたアークエンジェル
であつたが、消耗物資の量が心もとないと言うことが現状の一番の
ネックであつた。

「バジール少尉、ここから一番近い補給拠点はどこです？多少月
まで回り道となつても構いません。」

「…アルテミスではないかと。ただ、あそこはユーラシア連邦の基
地ですので地球連合船籍を得ていない我々が入港するのは難しいか
もしれません。」

アルテミス。ユーラシア連邦が数年前に作った最新鋭技術の塊でも
あるこの要塞は鉄壁と謳われているが、残念なことに主要航路から
は外れたところに存在するため、大規模な戦闘の舞台になつたこと
は無いと言う。

ラミアス副長が画面に出した宇宙図を見ていたアズラエルだったが、ため息とともに答えを出した。

「…まあここに行くしかないでしょうね。どうも近くに他の拠点はなさそうですし…。ラミアス大尉、進路をアルテミスに変更してください。それから…、バジール少尉、デコイを月方面に射出してください。こちらの内情を知らなければ、敵はそれを追ってくるはずです。」

「了解！」

…さて、私の知っている司令官だと言いのですが…。

アルテミス コントロールルーム

「ガルシア司令官！レーダーに敵味方不明の戦艦が！！」

「なに？…確かに不明だな…。通信可能圏内に入ったら誰何しろ。」

『傘』の用意もしておけ。」

「はっ！」

敵味方不明の戦艦が1隻…。ザフトの罠か？いや、それにしても不自然だ。本国も最近きな臭くなってきたようなのだから、厄介ごとではないといいが…。

アークエンジェル

「アルテミスより通信！所属と艦名を誰何しております！」

「応答しろ。」

「はっ、…こちらは地球連合軍……」

「ふむ…。ラミアス副長、アルテミスの指揮官はご存知ですか？」

「いえ、私も知りません。…1年ほど前に交代したような気がしますが…。」

「そうですか。」

「入港許可がありました！艦長！」

「分かりました。オペレーターの指示に従い入港するように。他は別命あるまで待機！」

アルテミス内ドック アークエンジェル ブリッジ

「艦長、武装解除してブリッジクルーのみ出てくるようにと通信が…。艦も包囲されているようです。」

「そんな!？」

「まあ当然の処置でしょう。こちらは艦籍も無い所属不明艦なんですから。とりあえず、外に出ましょう、話はそれからです。…一応フラガ大尉も来て下さい。」

「俺？艦長たちだけじゃダメなの？」

「ヤマト少尉はともかく、あなたは太尉なんですから仕方ないでしょう。…私と違って正規軍人なんですから文句を言わないでください。」

艦から出てきたアズラエルらに対し、ドックに来ていた副司令官は司令官室に来るよう伝えた。

「…警戒してたんじゃないのか？」

「私に聞かないでくださいよ。…バジール少尉、分からないですか？」

「いえ…。」

司令官室では、まだ30ぐらいであろう司令官が大仰に出迎えていた。

「よく来てくれた、アークエンジェルの諸君。私はこのアルテミスの司令官を勤めているジェラード・ガルシアだ。聞けばあのヘリオポリスから逃げ切ったそうではないか。本国も驚くだろう！」

「ありがとうございます。怪しい艦であった我々を受け入れてくれたことには感謝しています。」

「ん？君はいったい誰だね？…軍服でないところから民間人だとは思うが…。私はブリッジクルーを招待するよう言っただ、副官。」

「はっ。しかしその…彼が艦長のようでして…。ムルタ・アズラエルだと名乗っております。」

「何！？…おお、どこかで見たことがあったかと思えば…！エンデュミオン戦では盟主のよこして下さったヴァルクエリアに救われました！それにそこにいるのはフラガ大尉ではないか！？覚えていなか、私だ、同じゼロのパイロットであったユーラシアのガルシアだ！」

「へ？いや確かにガルシアは戦友だったが、こんなに老けてはなか

ったような…。」

「あの後下らん政治闘争に巻き込まれたのだ…。中佐に昇進して司令官になったとはいえ、ここは僻地だ。左遷と変わらんよ…。どうも最近の本国の…というより地球連合の様子からするに巻き込まれないこの地に来れたのはある意味救いだっただのかもしれないが…。」

「どういことです？地上ではいったい何が？」

「ああ、アズラエル盟主は地上と連絡が取れないのだったな。…閣下がいない間にかなりまずい状態になっているようです。」

それはとても意外なことで（後書き）

ガルシアの口調が分かりません……。いや、アニメ、小説ともに知ってはいませんが、彼の態度を変更することになったら途端に分からなくなりました。ぬお〜。

ご意見・感想募集中です。

それはとても急激な変化で（前書き）

遅れて申し訳ありません。
釈明は後書きにて。

それはとても急激な変化で

スエズ運河奪回戦の敗北はジブリールに後が無いことを表していた。アズラエルから代替わりして以来、援助や権益といった甘い蜜をあげ忘れていた南アメリカがまずは反感を示しだし、次に無理矢理意見を抑えられていた大西洋連邦系の軍人や政治家たちが不穏な動きをはじめていた。

ユーラシア連邦内でも一時的に大西洋連邦に主導権を握られることを嫌っていた議員の中から、良識派が現れだし、ジブリールの支持基盤は早くも崩れ始めていた。

焦ったジブリールはそれまでの計画を変更し、強引な手段を取り出した。

南アメリカでは大統領が謎の死を遂げ、ジブリールの傀儡となりつつあった国防長官が臨時大統領に就任した。

彼は南米各地で起こっていたデモ活動の規制を強化し、場合によっては軍を投入することためらわずに行った。

一方でジブリールはそれまでに掌握していた『ブルーコスモス過激派』を『清浄なる空』という新たに作った組織に編入し、横流しなどで手に入れた兵器を装備させることで私兵化した。

『清浄なる空』にはジブリール財閥研究班が研究していた「強化人間」の採用されなかったパターンの「人間」も配属しており、その

戦闘力は一般歩兵の比ではなかった。

ジブリールはそれらの私兵を強引に非常事態宣言地域での治安維持部隊として駐留させ、それ以外の地域でも「テロリストから政府関係者を守る」という名目で政敵の屋敷などに配属させ、不穏分子を監視させた。

大西洋連邦の大統領以下政府閣僚やアズエル派の政治家及び軍人はこれらのジブリールの動きを警戒したが、ユーラシアとの協調なくしてこの大戦を乗り切ることはできないと言う事実に関心を悩ませていた。

スエズ奪回戦から1週間たった頃、ジブリールはユーラシア連邦議会で『清浄なる空』を主力としたユーラシア連邦軍単独での、硬直した北部戦線を突破する作戦を強引に成立させ、翌週には開始させた。

ユーラシア連邦所属の軍が突然前進を始めるといふ事態に、現地を共同で守備していた大西洋連邦軍は驚き、作戦内容を知って失敗するであろうことを予想していた。

ところが作戦はジブリールの読みとは若干違う形で成功してしまう。スカンディナヴィアでの戦いによって地球連邦軍は予想以上に弱体化しており、防御拠点としていた大小さまざまな都市では強化人間も

どきが恐ろしい強さを発揮したのだ。

彼らは肉体的な限界をさまざまな薬や外科的改造によって破壊されており、知能や理性を著しく退化させることと引き換えにコーディネイター以上の戦闘力を持っていた。

勝利を重ね続けるユーラシア連邦軍の姿は大々的に宣伝され、ジブリールのユーラシア連邦内での地位は向上し、ついにはユーラシア連邦国防長官の地位をも手中に収めていた。

と、ガルシア中佐は地上の現状として語った。

「華々しい戦果を挙げ、議会の支持を集めたように聞こえるが裏では結構な反対派が暗殺されているらしい。私はたまたま前政権時に政争に巻き込まれてこのような辺境に赴任させられたから知らなかったが、どうも軍内でもかなりゴタゴタしているようだ。：噂では第1戦車師団よりも『清浄なる空』の方が威張っているらしい。」

「ウソだろ!？」

ユーラシアの第1、それも戦車師団と言えばエリート中のエリートじゃねえか!」

「確証は無い噂だが：な。：アズラエル盟主、あなたが居られないうちにかなり地上は混乱しているようです。ユーラシアや南米の勢

力圏はへたをしたらザフト勢力圏よりも危険かもしれません。…お気を付けて。」

「ありがとうございます、ガルシア中佐。本国に無事戻れましたら何とか昇進と中央への復帰を掛け合ってみましょう。…ところで、ザフトの追っ手についてなのですか…。」

「ん？ああ、やつらか…。どうやら居場所を嗅ぎ付けたようでして、傘の外縁に居座っているようです。…これをどうぞ。」

「確かに…。厄介ですね。」

「んゝ。しつこいねゝ。こっちから攻撃はできないのか？」

「ああ、傘は絶対的な防御力を誇るが、反面こちらから攻撃する手段もなくなるのだ。こちらからは要塞砲どころかM Aもアークエンジェルも出せん。」

「…失礼ですが、それは防衛兵器として重大な欠陥では？」

「全くだ。だが今回に限っていえば敵は少数。しかも目標がこちらの中なのだから無視もできん。補給物資が尽きれば撤退するだろう。」

「なるほど…。急ぎ地上に降りたいところですが、仕方ありません。マリユー副長、クルーに3交代で休憩するよう伝えてください。」

「はっ。」

それはとても急激な変化で（後書き）

お久しぶりにございます。

さて、大学で目標が見つかったこと、公開もしていない新連載を書き出してしまったことなどでだいぶ遅れてしまいました。申し訳ありません。

しかし、悲しいことです。が今後今までのような更新は無理となってしまうでしょう。一応1週間に1度は更新できるとは思いますが…。

さて、先ほど書きましたように実は新連載を書き出しています。

「まだ完結してないだろ！」という声も聞こえますが、ご勘弁を。

現在5話分完成しております。内容はメジャーなジャンルでのマイナージャンルと言う「それはとても〜」シリーズと似たようなものです。

と、いうよりメジャーなジャンルで皆様が満足できるほどのものが書ける気がしないと言うものがあります…。

で、公開して欲しいというご意見がありましたら公開しようと思っております。一応、公開しても「それはとても〜」シリーズの更新速度は変わらない予定です。

ただ、短期的には新連載の方がプロットがしっかりしているのでそちらの方が更新速度が速いかもしれません。

ご意見・感想募集中です。

6／7 誤字修正 郁様、ありがとうございました

それはとても慌しい出発で（前書き）

だいぶ遅れてしましまして…。待っていてくださった方には感謝し切れません。

それはとても慌しい出発で

「いなくなった!？」

アルテミスでの我慢比べを創めてから3日目。
アズラエル達は信じられない言葉を耳にした。

「はい。と、言いましてもレーダーの圏内から逃れたと言うだけで、
もしかしたらアークエンジェルがこのこと出てくるのを圏外で待
っているのかもしれませんがな。」

副司令官の言葉に考え込むアズラエル達。

「撤退した、と言うことでしょうか？」

「ありません。いくら艦数が少ないとはいえ特殊作戦を迫行する
ために万全の準備をしていたはずです。たかだか3日たった程度で
引き下がるはずがありません。」

「けど実際に奴らはいなくなってるぜ。理由は分からんが本国に呼
び戻された可能性もあるだろ？」

「そ、それはそうですが…。」

「ま、何にせよこっちの動きを決定するのは艦長さんの仕事だ。…
艦長、どうでる？」

「：待ち伏せの可能性もありますが、私たちもいつまでもここに閉じこもっていい良いというわけではありません。最大限の警戒をしつつ、急ぎ地球へ向かいましょう。ガルシア中佐、申し訳ありませんが無人M Aで途中までの直掩を頼みたいのですが。」

「そうしたほうがいいでしょうな。：副長、ハルピユイア50機の発信準備をしろ！」

「分かりました！」

「ありがとうございます。ラミアス副長、バジール中尉、出港準備を整えてください。フラガ大尉はヤマト少尉にこのことを伝えてください。」

「「了解」「分かった」

「機関始動。アルテミス出発後は全速で地球へ向かいます。」

「分かりました。機関始動！」

「ハッチ及び隔壁開放されました！司令部より通信！『貴艦の航海

に幸運あれ』」

「係留アンカー解除。艦長、いつでも行けます。」

「分かりました。アークエンジェル発進！」

アルテミスから出たアークエンジェルは進路を地球へと向け全速航行をしようとしていた。

ザフトの奇妙な動きに対する懸念はあったものの、アルテミスから直掩として出されているMA50機が存在がクルーの気を緩めさせていた。

「ようやく出れましたね、艦長。」

「そうですね、ザフトの動きも気になりますが……。まあいない部隊に対して警戒し続けるのも難しいですから仕方ありません。」

「しかし艦長。Gシリーズには特殊兵装を搭載していた物も存在します。ザフトがその利用に気づけば、厄介なことになるかもしれません。」

「ミラージュコロイドですか……。」

確かにリーダーなどの警戒網を完全にすり抜けてしまうことが可能なミラージュコロイドはこの状況下では無視できない存在である。

しかし…。

「いかにミラージュコロイドがあるといってもブリッツ1機程度でしたらどうしても対応できますよ。一見使い勝手がよさそうですが、そのまま使ってしまうえば戦力分散の愚を犯すだけとなります。」

「そうですね…。」

だが、それは甘すぎる見通しだったのかもしれない。なぜクルーゼ隊が精鋭と呼ばれているのか。その事をアズラエルは忘れていた。

「直掩機、帰投していきます。」

「そうですか、ガルシア司令官には世話になりましたね。」

直掩機の帰投からわずかに30分後、突然事態は急変した。

「左舷後方に高エネルギー反応！敵襲です！！」

「レーダー員、何をやっていた！？」

「敵、見当たりません！」

「ミラージュコロイド…ですか。バジルール少尉、慌てずマニュアル通り対応してください。フラガ大尉、ヤマト少尉は出撃態勢を整えてください。」

「はっ！イーゲルシュテルン起動！CIWS、左舷を中心に弾幕を張れ！」

「敵MS発見！ミラージュコロイドを解いた模様！」

バジルール少尉による的確な対応により、PS装甲を使用せざるを得なくなったブリッツはその姿を現していた。
しかし…

「レーダーに反応！ザフト軍艦2隻発見！敵艦、MSを射出しています！」

「ちっ、思ったより早かったですね…。フラガ大尉、早急にブリッツを撃墜してください。ヤマト少尉は増援の敵MSの足止めをお願いします。」

「そんな無茶です、艦長！1対4ですよ！」

「ええ、だから時間稼ぎでも構いません。…頼みましたよ、ヤマト少尉。」

「わかりました。…アズラエルさん、これは貸し1にしていいいでしょうか？」

「いえ、これも軍人としての義務の一つですから。とは言え、大変な任務ですから後で相応の報酬は約束しますよ。」

「分かりました。…キラ・ヤマト、ストライク出ます！！」

「ちょっと艦長、何の話ですか！？」

「ヤマト少尉も大人になったということですよ、ラミアス副長。」

「？」

それはとても慌しい出発で（後書き）

レポートだのクラス会の幹事だのテストだので忙しい日々ですが、何とか続きを書くことができました。とはいえ、不定期になることはこれからも避けられないでしょう…。いろいろ、すみません。

ご意見・感想募集中です！

それはとても危険な世界で

ヴェサリウス艦内―アスラン―

「…では、彼とは仲が良かったのかね？」

「はい、キラはきっと連合の軍人たちに騙されているんです！俺が説得してみせます！！」

「ふむ…だが説得できなかった場合はどうするのかね？彼が銃を向けてきた場合は？」

「…その時は、その時は俺がこの手で討ち取ります…！」

「分かった、結構だ。そのパイロットのことは君に一任しよう。」

「ありがとうございます！」

彼、アスラン・ザラは焦燥の中に囚われていた。

物心付いた頃からの友であり、今頃はオーブのどこかで元気にやっているだろうと思っていた生涯の（といっても未だに人生の半分も生きてはいないが）親友であるキラ・ヤマトとヘリオポリスで偶然の再開をし、しかも次の瞬間から敵同士となってしまったのだ。

彼にとって、いつもぽやんとしていてどこかお人よしなように見えるキラは弟のようなものであり、

だからこそ彼には、自分の親友が愚かにして狡猾なナチュラルに騙されて戦わされているように見えていた。

（…キラ、お前なら分かってくれるはずだ。今こそコーディネイターは団結して戦わねばならないのだということをも）

アスランは自分にとって弟であるキラが、兄である自分の言葉に反するなどとは考えられなかった。

忌々しいアルテミス要塞からこちらの思惑通りのこのこと出てきたアークエンジェルであったが、ザフト

軍の追跡部隊であるクルーゼ隊の考えとは異なり多くのMAによる護衛部隊が随伴していた。

「隊長！あれくらいの羽虫共なんて敵ではありません！すぐにでも強襲しましょう！」

「賛成！やっぱナチュラルなんだから数だけだつて！」

イザークとディアッカの発言に思案顔となるクルーゼ。

「アスラン、君はどう思う？」

「俺は、もう少し待った方が良いかと……」

「アスラン、貴様怖気付いたな！そんなに怖いならお前だけ船に残つてろ！」

「違う！……今強襲を仕掛けたら、俺たちがたどり着くまでにアークエンジェルに加えて護衛のMA50機までニコルに襲い掛かるだろう。最悪、ニコルが落とされるかもしれない。」

「はっ！コーディネイターであるニコルがたかだかナチュラルの作ったMAごときに……」

「アークエンジェルには凄腕のMAとMSもいるんだぞ。そいつらを一度に相手して勝てるとも言うのか？」

「ぐッ……」

アスランの言葉に詰まってしまったイザーク。どうやらあまり敵の戦力分析ができていなかったらしい。

「：アスランの言うことももつともだ。では、敵の無人MAがいなくなってから攻撃を仕掛けるとしよう。：ミーティングは以上だ。各自解散したまえ。」

「レーダーに感！！敵MA50機です。アルテミスに向かっていく模様！」

「ふむ、どうやらアークエンジェルの護衛はいなくなったようだ。な。機関全速、パイロットは出撃態勢をとりたまえ。」

「「了解！」」

「パイロット、発進どうぞ！」

「アスラン・ザラ、イージス出撃する！！」

出撃命令が下り、発進したザフト軍MS部隊であったが、中でもイージスは最大速度で出撃し、後続部隊から離れていった。

（イザークやディアッカが来る前に説得しなければ…）

アスランが考えていたことはいかに早くキラを説得できるかであり、キラが説得に応じず攻撃してくるなどとは考えてもいなかった。

だからこそ、連携などは二の次にして普段の彼からしてみればらしくない突出をしていたのだ。

「レーダーに反応…、こちらに向かってくるのはMS1機…キラか！」

アークエンジェルから増援MS部隊に廻されたのはストライクのみ。後続のイザークが到達するまでまだ5分あり、アスランは弟分の説得が成功することを確信していた。

「キラ、聞こえるか！？馬鹿なことは止めてこっちに来い！」

その一言で終わる。

そう、信じていた。

しかし：

「その声は：アスラン！？やっぱりあの時あそこにいたのはアスランだったんだね！」

「そうだ！キラ、なぜ連合にいる！？お前はナチュラルに騙されているんだ！早くこっちに来い！」

「騙されてるって：。アスラン、僕が連合のパイロットとして戦っているのは人に言われたからじゃない！自分で決めたことなんだ。」

「何を言っているんだ。だったらなぜコーディネイターとして共に戦わないんだ？キラ、お前も知っているだろう。ナチュラルによって俺たちが迫害されていることを！俺たちはまとまって、ナチュラルと戦わなければならないんだ！」

「アスラン：。僕は、コーディネイターに優遇されたことも、ナチュラルに差別されたことも無いよ。それに、アブラエルさんは僕を1人の対等な人として僕と交渉したんだ。コーディネイターだからとか、ナチュラルだからとかは関係ないよ。」

それはアスランが考えていたキラとは思えないような返事だった。

コーディネイターならば団結して戦うべきだし、キラなんだからアスランの言うことを聞くのは当たり前。

そんなアスランにとっての前提が崩れ去った瞬間であった。

「なら：ならキラはどういえばこちらに来るんだ？そのアズラエルとかいうやつはキラにどんな条件を言ったんだ？」

混乱した中で、交渉という単語に反応できたアスランは当初は考えもしない形でキラを説得することとなった。

「えーと、まずは僕と僕の友達のアズラエル財閥での終身雇用の約束と、地球での衣食住を始めとした生活の保障、それからゼミで研究しようとしていたことの支援の約束と、連合軍兵士として戦ったときの特別危険手当。」

啞然とするアスラン。

「：それから条件とは違うけど、ヘリオポリスとは違って食糧事情なんかはずっと良いらしいし、毎日お湯をたくさん使ったお風呂に

も入れるらしいし、重力がコロニーより強いから運動をそんなにしなくても太りにくいらしいし、料理も地域によって千差万別なのが僕が暮らすことになるだろう場所ではほとんど食べられるらしいよ。」

キラの発言は、アスランに深い衝撃を与えていた。

あんなにも優しくかったキラが、同胞の命よりも豊かな生活を送ることを選んだことが許せなかったからだ。

「ふざける「あ、後Nジャマーの影響で地球と月以外では見れなくなった『アニメ』も見れるって。」…何？」

しかしそのアスランの激情もアニメの前では無力だった。

「『魔電少女エレカル・このか』とか『機工兵士ドズダム』とか『クリミナル・ドール』とか見放題だって」

「そんな、そんな…。当選以来支持率90パーセント超だったクライン議長の人気は30パーセントも下がって、議長が変わりの娯楽として急遽自分の娘をアイドルにさせなきゃいけない原因となった『アニメ』が！？コーディネイターの技術力を結集して、戦費の調達も忙しい時期に国家予算の5パーセントをも投入してプラントオリジナルのものを作ろうとして、「パクリ同然」と言われてしまったあの『アニメ』が、見れるだ！？」

「うん、毎日ね。」

その時、アスランは負けを悟った。

正義は自分たちにあったが、連合の人間はキラの胃袋と脳を握っていたのだ。

「アスラン、もしかしたら君の言っている事は正しいのかもしれない。だけど、正論だけで人の動きが決められたら、世の中の夫婦喧嘩はもうちょっと夫の勝率が高いはずだよ。」

「そうか…そうなのかもしれないな…。」

アスランは、説得をあきらめなければならなかった。

「ちょっと待てアスラン！『クリミナル・ドール』が何だって!？」

「いや、気のせいだイザーク。何でもない。」

今のアスランがやるべきことはキラの説得ではなく、同じ犠牲者が生まれないようにすることだった。

それはとても危険な世界で（後書き）

今回アスランがとち狂ってます。

と、言うより話が全体的になんか変。とりあえず、ぜんぜん話に出てこない日本が実は世界である意味一番影響力を持っているという話。

ご意見・感想募集中です！

それはとても醜い世界で

アスランがキラの説得に失敗したその頃、アークエンジェル付近での戦闘は収束しつつあった。

「バリアント照準C4宙域！ブリッツをB4宙域に追い込め、撃て！！」

「ブリッツ、フラガ機及び子機4機より被弾！後退していきます！」

「ふむ、エネルギー残量に不安が出てきたのでしょうか…。フラガ大尉、深追いせずヤマト少尉の援護に向かってください。」

「了解。…援護助かったぜ。」

ブリッツを退け、キラの元へと向かうフラガ機。

ラミアスは一安心する一方で、連絡の来ないキラに対して不安を覚えた。

「トノムラ伍長、ヤマト少尉の戦闘はどうなってるの？」

「それが…。」

言葉を切るリーダー員。

その反応に不安の大きくなるラミアス。

しかし：

「：戦闘らしい戦闘を確認できません。どちらかというと、イービスがデュエルを羽交い絞めに行っているような：。」

「え？」

予想外の言葉に一瞬思考停止状態となるラミアス。

報告したトノムラも微妙な表情だ。

「え？え？」

「ラミアス副長、落ち着いてください。：ではヤマト少尉は何をしているんです。」

「そればかりは何とも分かりませんが：。ただ、激しい戦闘をしているというわけではなさそうです。」

「ふむ：。（仲間割れ、というわけではないでしょうし。どういことですかね。：まあ考えても分からないことを悩んでも仕方ありません。後でキラ君に訊けば済むことです。）：ザフトの母艦の方はどうなっています？あちらが参戦しては有利とは言えなくなります。」

「レーダーの索敵範囲内にはいます。戦闘宙域まで20分といったところでしょか…。あ、信号弾を確認！敵、後退して行きます。」

作戦の失敗を悟ったのか、一時撤退を始めるザフト軍。

アークエンジェル側としてもこれに付き合う必要は無いため、逃走に全力を挙げることとなる。

「ラミアス副長！いつまでも呆けてないでくださいよ。一応私と違ってあなたは正規の軍人なんですよ。」

「…はっ！す、すみません。フラガ大尉、ヤマト少尉の搬入を急いでください！機関最大！」

こうして、アルテミス宙域沖での戦闘はあまり締まらない形で終わりを告げた。

アルテミス宙域沖戦から1週間

アークエンジェルはその速力を生かし、何とかザフト軍の追撃から逃げていた。

アルテミスで補給物資と共に受け取っていたセラミックス爆雷やデコイを時にはばら撒き、クルーゼ隊を慎重に行動させてきたのだ。

とはいえ、もともとクルーゼ隊はその任務の性質から速力に自信のある艦艇を用意していたのであり、懸命な努力むなしくまたも追いつかれそうになっていた。

「通信員、まだ連合軍宇宙艦隊から連絡はありませんか？」

「は、はい。まだ、通信ありません。…すみません。」

「バスカーク二等兵、艦長はあなたを叱っているわけではありません

ん。そんなにおびえなくて良いんですよ。」

「はい…。」

（ヘリオポリスの陥落からすでに2週間以上が経過し、いい加減連合軍の艦隊は動き出しているはず。

特にG計画を特に推進していたハルバートン提督はすぐにも飛び出すと思うのだが…。）

ラミアス副長とバスカーク二等兵のやり取りを耳から聞き流し、アズラエルは考える。

自らの地球連合軍内における地位。
地球連合軍におけるG計画の重要性。
ハルバートン提督の発言力。
ブルーコスモス派議員の議会での勢力。

自らの考えている通りならば当の昔に搜索部隊を出しているはず。

しかし…

（ガルシア中佐の言う通り、ジブリールが暴走しているとしたら…。
まずい、かもしれませんね。）

そう、アズラエルの考える元となっている情報は古かった。

ガルシアの言っていた情報が正しいのなら、ジブリールにとってアズラエルは何が何でも潰しておきたい人間のはず。

（ジブリールといえど私がまさか生きて、アークエンジェルの艦長をしているとは思えないでしょうが、ハルバートン提督を左遷させている可能性はある。）

情報が必要であつた。

的確な判断ができる程度の情報が。

（月に、寄るべきか？）

聞いた限りではジブリールは地盤固めにかかりつきりらしい。

そのような状態ではとてもではないが月まで手が廻せていないだろう。

そこで、一度自らの態勢を立て直すべきかもしれない。

「ふむ…。ラミアス副長、進路をアルザツヘルに変えてください。」

「え？ア、アルザツヘルですか？」

「ええ、月のアルザツヘル基地ですよ。」

アークエンジェルは政争の渦中に巻き込まれることになりそうだった。

それはとても醜い世界で（後書き）

アニメに皆さん盛り上がってるようで、作者としても予想外な限りです。

「クリミナル・ドール」、どんなんでしょうね。私も気になるころです。

ご意見・感想募集中です。

それはとても秘められた知らせで

アルザッヘル

月の地球側に作られた基地であり、最も早く建設された月面コロニー施設でもある。

技術力の進歩と共に国際宇宙ステーションを経由せずとも直接月面まで資材を運べるようになると、老朽化した国際宇宙ステーションの代わりをも担うようになった。

人類の活動圏が月から更に延びると、経路施設としてのアルザッヘルはいささか不便となり、新たにL1宙域に世界樹が建設され、新たな宇宙経済の中心となったが、アズラエル財閥によってNSSCの発電所等施設が集中して作られ、その電力を求めて大量の工場群が建設されると、アルザッヘルは地球連合宇宙軍にとっての心臓となった。

更に、世界樹がザフト軍の攻撃によって文字通り粉碎されてしまったことで宇宙経済の中心も自然とアルザッヘルへと戻り、今やアルザッヘルは地球連合軍の重要拠点トップ3に入っていた。

アルザッヘル基地総司令部 司令長官室

コンコン

「入りたまえ。」

「失礼します。プトレマイオス基地よりヘリオポリス調査艦隊から送られたレーザー通信が転送されてきました。」

「ご苦勞、そこに置いておいてくれ。」

「はっ。」

報告書を置き、退室する兵士。

部屋には現在司令長官、ビラードしかいなかった。

グリマルディ戦線ではムウ・ラ・フラガやガルシアといったメビウス・ゼロろ部隊を率いた男で、戦闘勝利後はその功績から少将へと昇進。アルザッヘルの基地周辺一帯の総司令部長官へ任命された。

そこにはアズラエルやハルバートンと言った能力主義の人間の意図しか介在しておらず、故に今まで下らない政治闘争とはあまり縁の無い生活できていた。

ビラードにしてみても今までしたことも無かった政治を自分ができるとは思えもせず、これから先しないですんで欲しいと思ってもいた。

しかし、そんな平穩は今まさに打ち破られようとしていた。

ビーツ

ガチャッ

「ビラードだ、どうした。」

「ビラードか、私だ、第八艦隊のハルバートンだ。」

「どうしました、急に。秘匿回線を使うということはただの敵襲というわけではないでしょう。」

「うむ…。第八艦隊の無人偵察艦が味方信号のみを出した艦籍不明の戦艦を発見した。」

「艦籍不明だと？敵の罠ではないのか？」

「いや、私も気になって無人MAを出したのだ。…あれはアークエンジェル級戦艦だ。」

「アークエンジェル級だと！？ではまさか！？」

「ああ、G計画の生き残りだ。」

「…それで、アークエンジェルはこちらに向かっているということだな？」

「そうだ。だがどうやらザフトの追っ手に追われているらしいのだ。これをどうにか援護しようと思うのだが、艦隊の出撃許可を出して

はくれないか。」

「それぐらい構わないが……。なぜその程度のことでも秘匿回線を使う？ 一般回線でも構わないだろう。」

「：あまりお前にこういうことを話す気は無いのだが、ジブリールがG計画、というよりアズラエル盟主の関わっていた計画に対して批判的なのだ。まだ明確に態度に表しているわけではないが、排除しようともしているらしい……。」

「：なるほど、政治の話というわけか。まあ私としても拾い上げてくれた盟主と中將には感謝しているし、どちらかというジブリールのことはあまり気に入ってもいない。その程度のことだったらいくらでも協力しよう。」

「すまない、助かる。」

「提督、あなたの方が階級は上なのだから謝らないでください。：ではハルバートン提督、貴官及び傘下の第八艦隊にアークエンジェル級戦艦の救援命令を出す。これは極秘任務であるからして、2階級以上の上級憲兵及び命令者であるビラード少将以外に対して守秘義務が発生する。心して懸かるように。」

「はっ。命令承りました。：通信終わります。」

「うむ。」

ブツッ

通信が途絶えると、再び室内に静寂が訪れた。

「…アルザツヘル及び周辺宙域での戦闘は原則として禁止されている。と、いうことは…。」

宙域地図を眺めるビラード。

そこには圧倒的質量を誇る惑星

「低軌道での戦いとなるだろうな…。」

地球が映っていた。

それはとても秘められた知らせで（後書き）

と、いうわけで次回ようやくの低軌道会戦。あ、ちなみにハルバートン提督がアルザッヘルにいる関係でアルスター議員はアルザッヘルでお留守番をします。よかったね、フレイ。残念だったね、キラ。君の初恋人はもう少し先になりそうだ。ちなみに、次回の話が終わると番外編が入ると思います。…直後かどうかはまだ不明ですが。ご意見・感想募集中です！

それはとても不安な要素で

その報告はちょうどアルザツヘルに着くまでにもう一度ザフトの追撃部隊と戦わなければいけないことが判明したときにあった。

「…だめですね。このまま全速で進んでも13時間後には追いつかれてしまうでしょう。」

「私たちがアルザツヘルに着く予定時間は15時間後ですから…。」

「それ以前にアルザツヘル周辺の宙域は特別防衛宙域ですから原則的に敵部隊を進入させられません。」

「駐留艦隊が援護に出てくることを期待するしか…。」

艦橋で私とラミアス副長、そしてナタルが今後の方針を話し合っていたとき、レーダーを監視していたバスカーク二等兵から声がかけられたのだった。

「ぜ、前方200キロに戦闘艦発見！艦籍照合……地球連合軍無人偵察艦です！！」

「そうか、ご苦勞。…艦長、どうなさいますか。」

「おそらくアルザッヘル基地の哨戒部隊だとは思いますが：無人艦ですから連絡も取れませんしねえ。とりあえずこちらを発見した基地の動きを待つしかないでしょう。」

「では進路はこのまま？」

「お願いします、ラミアス副長。」

このやりとりから3時間後には今度は無人MAが来ており、基地もしくは艦隊がこちらの接近に気づいていることは判明した。

そしてそこから更に2時間後：

「か、艦長！地球連合宇宙軍第八艦隊からの通信が入りました！まだ不鮮明ですが第八艦隊なのは確かです！」

「ザ：ザザ：こ、こちら：ザザ八艦隊：ザ：ザザ、クエンジェル：ザ答せよ！：り返す：ザザ：…。」

「ふむ、ようやく連絡が取れましたか。第八艦隊ということは追撃部隊程度ならすぐに壊滅できますね。」

「アーガイル二等兵、こちらからも続けて接触を図るように。通信が明瞭になり次第知らせろ。」

「分かりました。」

その後通信が正確に取れるようになると、ハルバートン提督自らが通信に出、追撃部隊とどこで戦うかについての指示を出した。

やはりアルザツヘル周辺は嚴重防衛の関係上戦闘をできないらしく、だいぶ離れることとなるが地球のすぐ近くで戦うこととなった。

追撃部隊のMSの機動力を地球の重力で削ることを目的としている。MAも重力には弱いが、こちらは戦艦の砲撃力において圧倒的に分があるためそこまで気にする必要は無いのだ。

しかもいざとなれば地球へと降下すれば逃げられる。

後に低軌道会戦と呼ばれるようになる戦いの戦場はこのような理由から選ばれた。

一方そのころのザフト軍クルーゼ部隊

クルーゼ部隊でも当然のことながらアークエンジェルが援軍と合流しつつあることを察知していた。

とはいえここまでわざわざ追撃をしていて「敵が強かったから逃げました。」では本国が許してはくれないだろう。

開戦初期であればもう少し余裕のある状況だったのだが、最近のプラントの国民は長引く生活レベルの低迷から士気が低くなっていた。

「勝利の美酒を与え、短期終戦という希望を見せなければ現政権は終わる。」とはあるプラントのマスコミの報道だが、その言は当たらずとも遠からずであり、

評議会議員たちは焦っていた。

「フツ、不利な戦況にも拘らず虚勢を張れる連合と有利な戦況にもおびえるプラント：愚かしいものだ。」

クルーゼは艦橋で呟いた。

幸いなことにアデスを始めとするクルーたちはアークエンジェルに早く追いつかんと動いているために先ほどの言葉を聞いてはいないようであった。

彼は現在考えていた。

援軍と合流したアークエンジェルに対して攻撃を仕掛けるべきか否か。

かつてのクルーゼであれば迷わず攻撃を仕掛けたはずである。

彼にとってナチュラルであろうとコーディネイターであろうと憎むべき対象であり、己が部隊といえど隊員が死ぬことに対しては特に思うことも無い。

では何が彼を考えさせているのか。

それは最近のパイロットたちの戦闘意欲の減退によるものだった。

アルテミス宙域での一戦以来、アスランだけでなくイザークやディ
アッカといった面々まで顔色が悪くなったのだ。

ナチュラルへの蔑視、自分たちの能力の過信。

人間としてそれらがいいことかと問われれば首を傾げてしまうよう
なことだが、戦闘においてはそれらがあると無いとでは大きく異な
る。

自らに自信を持ち、勝利への確信を持たなければ兵士は臆病になっ
てしまうからだ。

あの戦い以前の隊員はその自信を持っていた。

ラストイやミゲルといった同僚の死も、憎しみへと変えることで力
としていた。

訓練にはより一層力を入れ、戦闘時には気炎を上げていたのだ。

それが今では、

今では…

「隊長、そろそろ警戒レベルをイエローにすべきかと…。パイロッ
トを待機させるべきでは？」

「…視聴覚室に連絡をいれ、パイロットたちを集めよ。」

「はっ。」

何が起こったのかは分からないが、アスランの説得は失敗し、逆にイザークらは何らかの影響を受けたらしかった。

彼らは非番の時間帯、視聴覚室に籠りアニメを見ては何かを羨むようになったのだ。

（これが戦闘にプラスとなる嫉妬であれば良いのだが…）

どうもパイロットたちに不安を禁じえないクルーゼだった。

それはとても不安な要素で（後書き）

すみません、低軌道会戦に入れませんでした。

だ、だってクルーゼ隊側が予想外の長さで状況説明をしちゃったから…。

ああ、話が際限なく伸びてゆく…。じ、次回にはちゃんと入ります。
ご意見・感想募集中です！

それはとても激しい戦闘で

アークエンジェルがハルバートン提督から告げられた宙域へたどり着いたとき、そこにはすでに整然と戦列を整えた第八艦隊の姿があった。

アガムムノン級戦艦8隻、ユグドラシル級超巨大空母4隻、防空巡洋艦6隻、その他艦艇12隻。

総数30隻になる地球連合宇宙軍最強とも言われている第八艦隊は、搭載MA数も2360機と膨大で、普通に考えればせいぜいナスカ級とローラシア級合わせて4隻しかないクルーゼ隊など鎧袖一触殲滅できて当たり前だ。

しかし、ハルバートン以下第八艦隊の幕僚たちは皆緊張感に包まれていた。

クルーゼ隊の隊長であるラウ・ル・クルーゼはかのグリマルディ戦線でMA100機以上を撃墜し、ネビュラ勲章を授与されたエースパイロットであり、その部下たちは連合から奪取した最新鋭機体であるGシリーズを使用している。

レールガンとミサイルを兵装としているMAではGシリーズを落とせなく、しかもこちらは何が何でもアークエンジェルを守り通さなければならぬのだ。

…と司令部付きの参謀たちが考えていると、アークエンジェルは事前の通達どおり旗艦メネラオスの隣へとたどり着き、臨時で艦長職をやっているという盟主アズラエルから通信が入った。

「やれやれ、何とかたどり着きましたよ、ハルバートン中将。」

言葉とは裏腹にそこまで疲れた表情を見せないアズラエル。

「私としても盟主がこの場に來たことには本当に感謝しているとも。」

「誰ですか。」

「もちろん、神にだとも。私はジブリールもアズラエルも信奉していないのだ。」

「そりゃそうでしょう。私はただの人間であって盲目的に依存されても困りますよ。」

「ジブリールは違うようだぞ。」

上官と雲の上にいるはずだった地球連合一の権力者との間で交わされる危険な会話に幕僚たちは嫌な汗をかいている。

「：まあその話はいったん置いておくとしましょう。現在直近の問題はザフト軍追撃部隊を追い払うことです。」

「そうだな。：今回の作戦の要はアークエンジェルを生き残らせることだ。最悪の場合、アークエンジェルにはアルザッヘルへ向かうのではなく大気圏降下をしてもらう。」

「当然でしょう。私は何としてでも生き残るつもりですよ。：言っておきますが、私は民間人であるのに戦闘に巻き込まれても危険手当は日当で50ドルしか出ないんですよ。死んでも生命保険しかありませんし。」

「それはなんと言うか…。まあ、仕方ないのではないか？」

「どこがですか。：今回も火力でこちらが上回っているのですから、以前輸送艦隊を撃滅したときと同じ戦法でいいと思いますが。」

「アウトレンジで、だろう。当然そうするつもりだ。：そもそもGシリーズにMAをあてて撃墜できるとは思えん。」

「クルーゼ機はシグーですから落とせますよ。」

「混戦でもか？まず無理だろう。：ジンやシグー相手には優位だった防空巡洋艦も主力兵装は実態弾だからな…。バッテリーの消耗しか狙えん。：アズラエル、アウトレンジでGシリーズは落とせると思えるか？」

「：難しいでしょう。どうやらあれに乗っているのはエースパイロットらしいですからね、ナチュラルには逆立ちしたってできない操

縦技術を持っています。」

「…くそっ。仕方ない、やれるだけやってみるしかないか。」

その時、レーダーモニターを監視していたクルーからの報告がある。

「レーダーに反応！戦闘艦4隻、ザフト軍のものです！！」

「話し合いは終わりのようだな。…主砲射程圏内までどれくらいだ！？」

「圏内まで30分！敵、MSを出した模様！総数20機！！」

「全力で来たようだな…。主砲射程圏内に到達したら全艦一斉射撃！5斉射後にMAを出せ！！」

「了解、5斉射後MAを出します。」

一方でアズラエルらアークエンジェルにもメネラオスからの指令は届いていた。

「貴官より命令文です！敵、射程圏内到達後5斉射せよ。機動戦力

については保留とす。」

「そんな！フラガ大尉とストライクも出すべきです！艦長から司令部に掛け合ってください！」

「落ち着いてくださいラミアス副長。提督は我々がいざとなったら後退しやすいように計らっているのです。無碍にするものではありません。」

「ですが相手はかのクルーゼ隊です。戦力は可能な限り当てるべきだと思いますが…。」

「いざとなったらもちろん出しますよ。ですがそれは敵が防空ライオンを突破してからです。：フラガ大尉、聞こえていましたね？そういうことですので、まだ出撃には時間がかかりそうです。」

「…わかった。友軍を見捨てるような気がするが…よくよく考えたら第八艦隊のMAって…」

「当然、直掩機を除いて全てハルピュイアです。あまり気にかけないでも構いませんよ。」

「…だよなー。じゃ、気にしないでのんびり待ってるよ。」

「ヤマト少尉にも伝えておいてくださいよ。」

「了解、了解。」

「：確かにわが艦の機動戦力はフラガ機の子機以外無人機がありませんね。」

「その通りですよバジルール少尉。ラミアス副長も分かってくださいましたか？」

「あ、はい。：申し訳ありませんでした。」

第八艦隊の5斉射は敵MSのうち8機を落とすことに成功した。

しかしその中にGシリーズは含まれておらず、また以前の戦闘を踏まえてMS部隊と距離を置いていた艦船にもダメージは与えられなかった。

連合軍の砲撃をかわした12機は次に防空システムの射程圏外に布陣を終えた無人MA群との戦闘に突入する。

いかに精鋭で知られるクルーゼ隊のパイロットとはいえ、彼我戦力は12対2000。

ジンやシグーを乗りこなす彼らは櫛の歯が折れるように少しずつ減っていく。

カッ！

宇宙空間という無音世界で、そのまばゆい光だけが1人のパイロットの死を知らしめていた。

「フィールズッ！！クソッ！」

MA部隊との戦闘が始まって20分。

遅れてきた戦艦の援護を受けつつとはいえ敵MAを1000機程に減らすという偉業を成し遂げたクルーゼ隊のパイロット達は、しかしその数を4機にまですり減らしていた。

「ディアッカ、そちらのバッテリーはどうだ？」

「くそっ、ナチュラルのやつらちよこまかちよこまかと…。ああ！
？バッテリーは…うげ、後30パーセント切ってやがる。」

「イザーク、ニコル、そっちはどうだ？」

「…20パーセントと少しだ。」

「僕も後30パーセントぐらいしかありません。」

「まずいな…。どうにかして態勢を変えないと…」「アスラン、イザーク、ニコル、ディアッカ聞こえるか？」隊長？」

「これより私も出る。そのMA群は私と戦闘艦でひきつけておく。君たちはアークエンジェルを落としてきて欲しい。」

「な！？隊長、いくらなんでもそれは無茶です！」

「む、君たちでは智将ハルバートの陣形は抜けんか。」

「そうではなく、いくらなんでもPS装甲の無い隊長だけでMAを1000機も押さえるというのは危険です！」

「私だけではなくガモフやヴェサリウスも出るが…。」

「機動戦力ではないでしょう！」

「…イザーク、アークエンジェルを落とすのにどれくらい掛かるかね。」

「10分もあれば十分です、隊長！！」

「イザークー！！！！！」

「イザーク、いくらオレでもそれはカンベンだぜ…」

「イザークさん、僕もそれはちょっと…。」

「貴様ら隊長が期待してくださっているというに応えないのか！？
もういい、俺だけでも行くぞ！！」

「ま、待て。…くそっ、しょうがない。…隊長、30分以内で戻ってきます。」

「ふむ、それぐらいであれば大丈夫だ。」

「はっ。行くぞ、ディアツカ、ニコル！」

「分かりました！」「おい、なんでアスランが仕切ってるんだよ。」

「お前がイザークの手綱を抑えていなかったせいだろうが！」

「俺のせい！？」

先ほどの悲壮感は消え、にぎやかにアークエンジェルがいる方向へと向かっていく4人。

さすがはクルーゼ隊長、と思っていたヴェサリウス艦長アデスのもとにクルーゼから通信が入る。

「聞いていたな、アデス。各艦250機ずつ担当したまえ。撃ちも
らしたのは私が抑えよう。」

その言葉に青くなるアデス。

ブリッジクルーの顔にも悲壮感が漂う。

「…冗談だ。」

そう言って通信を切るクルーゼ。

安堵するブリッジクルー。

そして、

（最近悪趣味な冗談を言うことが増えたような気が…）

パイロットらの調子が狂ってからストレスが溜まってるのだろうな
…と考えると、隊長の健康が気になってしまいうアデスであった。

それはとても激しい戦闘で（後書き）

長かった割りに終わってません。すみませんでした。

そして、クルーゼの性格を変えてしまっていること、クルーゼファンの方には本当に申し訳ありません！！

「ふっ、彼にも少しユーモアが必要なのだ」とか思ってるわけでは
…無いでもなかったり…。だ、大丈夫です。ドリーム小説なんかに出
てくるクルーゼはもつと変態的ですから！

ご意見・感想募集中です。

それはとてもきれいな降下で

「MS4機、防空ラインに進入しました！本艦に向かっていきます！」

「艦長！」「分かりました、フラガ大尉とヤマト少尉を出してください！」

「イーゲルシュテルン起動、アンチビーム爆雷散布！！」

「フラガ機、ヤマト機、出ました！」

G4機のまさかのMA群突破を受け、アークエンジェルはにわかに慌しくなった。

第八艦隊は防空巡洋艦を筆頭に多くの戦闘艦が対空兵装を展開し迎撃に当たるが、G4機はそれらを無視し、一直線にアークエンジェルへと向かっていた。

「フラガ機とヤマト機、バスターとブリッツに拘束されています！イージス、デュエルなおも接近！！」

「メネラオスより直掩MA25機到来！…ダメです、抑え切れません！！」

「バリアント照準…撃てえ！！…くそっ、駄目か…」

「無人MA900機：バカな！全機敵に拘束されています！！」

G4機の集中攻撃に対し、アークエンジェルと第八艦隊は有効な対策を打てないでいた。

彼らの神業的操縦は多くの攻撃を回避・迎撃し、当たった攻撃もPS装甲によって防がれていた。

「ダメージ率10パーセント突破！！艦長！」

「敵もエネルギーに余裕がなくなっているはずですよ！もう少し耐えてください。」

とはいえG4機にも余裕は無く、また長時間の集中力の使用はパイロットたちに見えない疲労を与えてもいた。

まずはストライクと対峙していたバスターが、そしてアエローと戦っていたブリッツも後退することとなり、イージスとデュエルは苦境に立たされることとなる。

友のもとへ、仲間のために討ちかかるキラ。

「僕の就職先と衣食住を壊すなあー!!」

訂正、若干自分のことも考えている模様。

「くっ！キラ、お前の言うことは俺たちの心を揺さぶるものだ！だが、それでも俺たちは、戦わなければいけないんだあー!!」

若干言う人間が違うような気がするが、そう気炎をはいてターゲットをアークエンジェルからストライクへと変えるアスラン。

そんな中イザーク操るデュエルは、致命的なダメージを負ってしま
う。

「ローエングリン照準！今度こそ当てろよ、撃てえー!!」

「くそっ！当たってたまるかぁー！！！！」

アークエンジェルから放たれた極太のレーザーを避けようとするイザーク。

しかしその陽電子の奔流は僅かながらも致命的なダメージをデュエルに与えていた。

「ぐあっ！…機体損傷…推進剤がっ！？」

デュエルの推進剤タンクに穴を開けてしまっていた。

「くそっ！このままじゃ重力にっ。おい、アスラン！キサマ助けろ！！」

しかし頼みの綱のアスランも現在キラと激闘中。

どう頑張ってもデュエルを助けられそうに無い。

「おのれアークエンジェル！ヤロー！テメー！ぶっ殺すっ！！」

イザークは大気圏降下の覚悟を決め、それまでの間アークエンジェルをレーザーライフルで狙うのであった。

「…ふう、何とかかなりそうですね。」

「艦長、イージス撤退していきます！デュエルも深刻な損害を負ったのか、先ほどから攻撃が散発的です。」

「重力圏から逃れられません！艦長、降下地点を決めてください。」

「フラガ機とヤマト機に直ちに帰ってくるよう伝えてください。…まさかここまで押し込まれるとはね。…降下地点はアラスカ、JO SH—Aにしてください。」

「い、いきなり本部に降りて大丈夫でしょうか…。」

「まあ何とかなるでしょう。私が乗っているんです、多少の無茶は何とかできます。」

「そ、そうですか。…降下目標、アラスカ、JO SH—A！！」

低軌道での戦いに何とか勝てたアークエンジェルは、戦闘終了によって一息ついていたハルバートンから通信を受けつつ、アラスカの地へと降りていった。

それはとてもきれいな降下で（後書き）

戦闘描写はやっぱり苦手です。とりあえず、原作のいろいろな話をカットしました。…だってアズラエル関係ありませんし。これから開発の時代です！

後、私はアニスが大好きです。
ご意見・感想募集中です！

それはゆったりとした降下で（前書き）

お久しぶりです。帰還しました。

それはゆったりとした降下で

アラスカ 地球連合軍総司令部JOSH-A

低軌道会戦での戦況を見守っていたJOSH-Aは若干慌しい雰囲気
気に包まれていた。

「デュエル、大気圏降下中！！降下地点予測…これは、日本！降下
予測地点は日本です！！」

「アークエンジェル、なおも高度を下げています！」

「第八艦隊、ハルバートン中将及びアークエンジェル副艦長ラミア
ス大尉よりJOSH-Aへの降下許可が申請されています！」

「司令！！」

そんな慌しい雰囲気の中、政治的采配によってのみ選ばれた基地司
令のホアン・ウォーラック中将は、適切な決断を取れる自信が全く
無かった。

（くそっ。何でジブリール様のいない時に限ってこんなことが起こ
るんだ！…どうする？下手なことをすれば責任問題だ…）

「司令！」

「えーい、クソ！副指令！君に全で一任する。適切に対処したまえ。」

「は？…分かりました。」

このときすでにホアンの頭の中はジブリールに判断を仰ぐことでいっぱいになっていた。

故にホアンは気づかない。

司令部内の空気がしらけたことも。

副指令であるサザーランド大佐の顔が笑みを作っていたことも。

そして、ラミアス大尉が副艦長でしかなく、アークエンジェルの艦長が誰なのかが分かっていないことに。

「艦長、JOSH-A副司令のサザーランド大佐より入港許可が降りました。」

「副指令から？司令はどうしたんですか？」

「それが：司令より全権委任を副司令が受けたようでして：。」

「バカな！それでは有事の際にその司令はいったい何をするつもりなのだ？」

「バジール少尉、：恐らくジブリール派によって政治的理由で抜擢されたでしょう。ユーラシア方面での戦線は順調だと聞きます。派閥内の優秀な軍人をそちらに優先的に置いた結果：。」

「JOSH—Aみたいな後方基地にはアンポンタンを置くことになったわけね。しかしどうすんのかねー？ザフトが奇襲攻撃でも仕掛けてきたら。」

「まあ可能性は低いですからあまり考えていないのでしょう。：それより、サザーランド大佐が副司令にいうことは、JOSH—Aと大西洋連邦の掌握は思ったより早く済みそうですね。皆さんにも手伝っていただきますよ。」

「おいおい、俺たちは一介の連合軍人だぜ。そんな政治的な世界には縁もゆかりもないし、巻き込まれたくもない：な、副艦長？」

「わ、私に振らないでくださいよ：。ただ、確かに私たちでは手伝えることは無いかと：。」

「ああ、別に特に政治的抗争で手伝ってもらおうとは思ってはいませんよ。しかし私がアークエンジェルをやっていたと知られれば、あなた方は今までどおりの政治的に中立な立場には立てなくなるということです。」

最近第八艦隊自体もハルバートン提督がG計画を推奨しているだけあってブルーコスモス派に近いといわれていますからね。

：恐らくこの艦のクルーは皆人事異動されるはずです。

次期主力艦として十二分な性能でしたから、そのクルーはかなり貴重ですから。それに振り回されるだけでも迷惑だとは思いますが…。その点だけはご了承を。」

「異動か…。大体どんな感じに振り分けられんだ？予想はついてんだろ？」

「ええ、まあ。」

恐らくフラガ大尉はパイロットの教導官に、ラミアス大尉は技術工廠に、バジール少尉は昇進後に士官学校の教官、他のクルーもそれぞれ昇進して2番、3番艦で要職に着くと思います。」

「子供たちはどうなるんですか？彼らは野戦任官したとはいえ民間人です。」

「彼らはキラ君と約束したとおりアズラエル財閥に就職できるよう手配します。オーブへの帰国も、逆にオーブから家族を呼び寄せることも可能だと思います。」

「そうですか。よかった…」

「で、われらが艦長殿はまた雲の上に逆戻りってことか。」

「全くです。ここの艦長職の方が仕事が少なくて楽ではあるんですが、仕方がありません。」

「ま、せいぜい頑張って俺たちを楽にしてください。」

「フラガ大尉！先ほどから上官に対して…。」

「高度2万フィート切りました！艦長！」

「無駄話はこちらまでですね。各員、配置についてください。」

「「了解」」

それはゆったりとした降下で（後書き）

帰省から戻ってまいりました。

さて皆さん、世の中には帰省先でも出張先でもこつこつと小説を書き、戻ってくるどどばつと一気に投稿するすばらしい作家さんがいます…。

残念ながら私は違います！！

1行も書いてはいません。なのでスピードも変わらないでしょう。すみませんね。

ご意見・感想募集中です！

それはとても急いだ話で

無事JOSH-Aへと降下し、ドックに入港したアークエンジェルであったが、副司令からは上陸許可のみが許され、今後の任務については保留とされた。

臨時艦長であったアズラエルのもとには地球連合事務局から直々に専用車がまわされ、艦長としての業務をラミアス大尉に引き継ぐ命令のみを出すと、そのまま連合本部へと連れ去られていった。

地球連合本部 事務局ビル

「……これは本当のことですか？」

「はい、全くの事実です。」

久々に見た事務局に存在する自らの執務室。

かつて自らと秘書15名が詰めていて、それでも仕事量をこなせるかと緊張感が漂っていたこの部屋からは一切の書類が消え去っており、一見するとまるで全ての懸案が片付いているかのように見えた。

しかし、どうやら事情は違っただけらしい。

「この部屋にあったすべての書類は収納仕切れなかったため、全て電子化してこれらのメモリーディスクに保存されております。」

ロゴスの臨時盟主にして地球連合経済社会理事代理

そんな肩書きを持つジブリールは、当然のことながらそれに見合った仕事をこなさなければならなかった。

ところが、意気揚々とアズラエルに代わって権力を手に入れたジブリールが見た寄せられてくる仕事量は、殺人的なものであった。

しかもユーラシア連邦でも要職についてしまったジブリールには更に加えての仕事が廻された。

故に、彼は彼から見てあまり重要そうに見えない仕事を切り捨てることにした。

その結果が未処理の懸案事項が詰め込まれたメモリーディスクとして眼前に存在した。

「…まあ良いです。1本に纏められているのがまだ救いなんでしょうね。これは何百ギガバイトですか？」

「…16テラバイトです。」

「…………。」

「だ、大丈夫です。まだすべては埋まっています。」

（これは…相当まずいですね…）

ひと通り溜まっていた懸案事項に目を通したアズラエルは、地球連合の経済事情が予想以上に悪化していることに気づいていた。

（ユーラシアのほうはまだ少しは手をかけているようですが、南米と大西洋連邦の事業はほとんど進捗していませんね…）

全体的に企業倒産率が5ポイント上がっていますし、民間人の購買力が低下していますね。

軍需産業以外での資本投資額も低下していますし…ジブリール、あなたはまさに内憂といってふさわしいですよ…！（）

特に追い詰められているわけでもないのになぜか経済が国家総動員体制に移行しつつある状態になっている地球連合。

このままでは長期間の継戦能力が失われしまうため、アズラエルは急遽ロゴス主要メンバーと映像会談をすることにした。

「おお、アズラエル盟主！ご無事でしたか。」

「はい、まあ何とか生き残りましたよ。それにしても私がいない間にずいぶんとまあ国内情勢が悪化しましたねえ。」

「うむ、どうやらジブリールは戦果を挙げることに目を向けすぎて経済のことを忘れているようでしての。」

膝元のユーラシアですら経済の好転は軍需産業のみによって支えられている状況じゃ。」

「分かっているのなら何で止めてくださらないんですか。：とりあえず、大都市部での戦争報道を規制しましょう。今みたいに四六時間中戦争報道をされていたら購買意欲だってわきません。」

「まあ節約節制ばかりされていたら困りますからな。」

「アズラエル盟主、連合内での結束も高めてもらえませんか我々ロゴスメンバーとしても柔軟な経済活動が取れません。特に南米地域

では反地球連合の感情が高まっているため、下手をすればプラントの策源地とされてしまう恐れもあります。」

「ジブリールの報告書には南米にはすでに手を打ってあるというように書いてありましたが？」

「トップを入れ替えて、国民を恐怖政治で押さえ込んでいるだけじゃ。いずれ限界が来るだろう。その前に何とかして欲しいというわけじゃ。わが社も南米にはかなりの工場設備を置いているからの。」

「…分かりました。…それと、宇宙戦艦の新型艦を次期主力艦として建造してもらいたいのですが、レーンはどれくらい余っていますか？」

「どのくらいの数作ろうとしているんですか？まさかアガ멤ノン級を全て廃艦にしようとしている訳ではないでしょう？」

「今のところ一個艦隊あたり2〜3隻配備しようと考えています。」

「それでしたら5、いや10はいけますかね？」

「ふむ、私もそれぐらいでしたら。」

「わしも今月からアルザツヘルのほうに工廠ができるからそのぐらいなら何とでもなるぞ。」

「決まりですね。ふむ…では一月あたり1隻のペースも不可能ではないですね。」

「ほう、アズラエル盟主はその新型艦にずいぶん期待しているようですな。」

「ええ、あれは戦艦としては初のMSに対抗できるものですからね。」

それはとても急いだ話で（後書き）

いったんここで切ります。

ううむ、今話ちよつとつまらないお話ばかりですね。しばらくはこんな感じの裏話ばかりになります。：アズラエル仕事をサボってましたから。

ご意見・感想募集中です！

それはとても大きな変化で（前書き）

今回は短いです。…そして眠い。

それはとても大きな変化で

アラスカ 地球連合総本部臨時総会

アズラエルの帰還から8日後。

地球連合は異例の速さで臨時総会を開くこととなった。

もちろんそれは非常事態という名目行われていたジブリールへの権力の集中を、元の状態に戻すということであり、未だにジブリール派がアズラエルが健在な状態のブルーコスモス派を超えられていないことの証明であった。

しかし、全てがアズラエル失踪前の状態に戻ったわけではない。

「ですので、私及びロゴス全体の総意としましては、現在の総動員体制に近い状態の経済体制を早急に元に戻すべく、提案いたしましたように国民の意識を戦争から逸らすべく、戦争報道への規制を行ってもらいたいです。」

「ふむ、ではその規制というものは戦果の限定的報道ではなく、一切の報道を一律に規制するということですか？」

「その通りです。勝利、敗戦いかに関わらず戦争への意識の集中は購買意欲の著しい縮小を招きます。今大戦が長期戦になろうとし

ているのが明らかな今、経済状態を過度に戦争に特化させるのは得策ではありません。」

「アズラエル盟主の提言、反対意見はありますか？」

「その提案は受け入れられませんね。」

「ユーラシア連邦代表…ロード・ジブリール国防・経済担当大臣。発言を認めます。」

そう、アズラエルがない間にユーラシア連邦において政敵の排除に邁進し、ロシア方面での戦線では自らの派閥の軍人に功を立てさせていたジブリールは、ユーラシア連邦を半ば牛耳る存在にまでなっており、地球連合内でもユーラシア連邦の代表という立場を手に入れていたのであった。

「アズラエル盟主が言うように、経済体制の見直しが必要であるとは思いますが、僕はそれは地球連合が一律的に行うことではないと思うんですよね。」

なぜなら、前線から遠く離れてぬくぬくとしている大西洋連邦と、僕たちユーラシア連邦では事情が違いますから。」

むっとする大西洋連邦の軍人たち。

「経済体制の見直しは、加盟国各国が独自に行うべきでしょう。」

「発言は以上ですね？…では採択を取ります。

賛成は…大西洋連邦の1票。反対は…ユーラシア連邦の1票。残り2カ国は棄権ですか…。
よって本件を不採択とします。」

その後もこまごまとした案件が消化されていき、いくつかの案件ではユーラシア連邦との若干の対立を見せながらも臨時総会は無事に閉会となった。

しかし、連合内に対立構造が生まれたことは、それまでに大西洋連邦が持っていた国際的求心力が低下したことを示すことになった。

2日後

——南アメリカ合衆国各地で暴動発生！——

——反ジブリール派、親プラント派、まさかの結託！——

——合衆国軍地方部隊、続々離反——

——合衆国大統領、国外亡命の模様——

——プラント評議会、反政府軍支援を表明——

アズラエルによる南アメリカ合衆国の懐柔策は一足遅かったのだった。

それはとても大きな変化で（後書き）

短かったですね。いえ、私が悪いのですが。しかしこれで地球連合の実質構成国はユーラシアと大西洋連邦だけになっちゃいましたね。

さて、次の話はわれらがイザーク君の話です。お楽しみに！！

ご意見・感想募集中です！

それはとても面倒くさい体制で（前書き）

予告通りイザークです。

それはとても面倒くさい体制で

イザークにとってそれはあまり定かではない記憶。

コックピットの空調機能の限界を超え、上昇し続ける室温。

鳴り響き続けるアラート。

数を増やし続ける機体のレッドサイン。

耐久訓練で受けたどの想定状況よりも大きなG。

それらの悪条件が重なる中、イザークは意識を失うまいと必死であった。

確かにこの状況下、はっきりといって意識を失った方が楽ではあったろう。

しかし、

「くそがつっ!! 降下予測地点の算出ぐらいとつとと終わらせろ、このポンコツがつっ!」

おおよその概算地点が太平洋ではなく東アジアと表示された今、万が一にでも大都市に落下することを防ぐためにもイザークは意識を失うわけにはいかなかった。

ピピピッ！

「算出完了…降下地点…日本…東京だっ！？」

ビーツ

——高度、10万フィート点突破

あわてて落下軌道を変えようとするイザーク。

しかし推進剤が使えない現在、イザークにできるのは強襲降下時に使用するパラシュートを調整して、少しでも人が少ない地点を狙うことぐらいであった。

「何とか東京湾に……ダメかつ！他は、他にどこか人のいないところはあるっ！？」

そうして何とか人の少なさそうな地点へ降りるよう調整し終わると、

イザークは氣を失ってしまったのであった。

「……………むっ…。ここは…。」

イザークが氣がつくと、すでに機体は落下を終えているようであり、体を押さえつけるようなGはすでに感じられなかった。

「…アークエンジェルに叩き落されて…俺は…そうだ！周辺への被害は！？」

ナチュラルが憎いとはいえ、いくらなんでも開戦すらしていない国の、それも民間人を殺すことに罪の意識が無いわけが無く、イザー

クはデュエル周辺の状況を把握することにした。

「メインカメラは…確かアークエンジェルからの流れ弾で壊れていたな…。サブカメラは…熱に耐えられなかったか…。仕方が無い…。」

外部の情報を得る手段が無くなっている現在、残された手段はハッチを開けて直接見るしかない。

しかし…

（開けたとたんに暴徒に襲われなければいいが…。こればかりは運か…）

非戦闘員を大量に殺したとなれば、怒り狂った群集にイザークは殺されるであろう。

いくらコーディネイターとはいえ、数の暴力に勝てるとは思えない。

「とはいえ、いつまでもここにとどまれるわけでもなし。しょうがない、一か八か…!!」

ロックを解除し、思い切ってハッチを開けるとそこには：

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

制服姿やら背広姿やらの人間が大勢いた。

上空を見上げると、多くのヘリコプターが飛んでいる。

しかし、周囲には小規模なクレーターはできているが倒壊したビルやら、死傷した民間人やらといった姿は確認できなかった。

想定外の状況に混乱するイザーク。

とりあえず、一番自分から近いところにいた背広服に訊いてみた。

「ここは、どこだ？」

その後いくつか質問をした結果分かったが、どうやらここは都内にいくつかある森林公園の一つらしい。

日本政府側も大気圏外から落下してくるデュエルの姿を確認しており、直ちに都内全域に戒厳令を敷こうとしたのだが、間に合わなかったそうで、現在も通常通りに経済活動が行われているようだ。

で、ひと通り質問をして最後にイザークは尋ねてみた。

「俺はこの後どうなるんだ？」

と。

最後に質問をした途端、周囲の男たちが途端に騒ぎ出した。

なにやらもめているらしい。

「おい、いったいどうなってるんだ！説明しろ！！」

「いえ、なにぶん今回のことはイレギュラーなこととして、管轄が決まっていないのですよ。」

「はあ！？そんなの軍が捕虜として引き取るに決まってるだろう？」

「しかし現在日本はプラントと開戦していませんので捕虜が取れないのです。となるとあなたの扱いは非合法工作員もしくは密入国者なのですが…。」

「私どもとしては超法規的措置としてあなたの身柄を拘束したいのですよ。」

「誰だキサマ。」

「内閣調査室のものです。ちなみにこちらの方は警視庁から、あちらの方は東京都入国管理局から来ています。」

そのほかにもあなたを拘束するために、厚生省検疫局、陸軍、東京都関税局、東京都陸運局、総務省通信課の方々等が動いています。」

「何でそんな面倒なことに…。」

「なにぶん非常時ではないですので、平時の法に基づいて動かなければならないんですよ。」

「…1時間前まで戦地にいたんだぞ。」

「ここは平和なんです。」

その後、関係各施設に行く羽目になりこの国のトップとは翌日に会うということになった。

「お疲れ様でした。明日までは指定されたホテルでお休みください。」

「…全くだ。そういえば俺のデュエルは？」

「…代々木公園に置きっぱなしでは？」

「馬鹿かキサマは！」

公園にたどり着くとそこにはすでに機体がなくなっており…

——レッカー移動 最寄の警察署長からの許可証を得てから〇〇町の駐機場に取りに来てください

※レッカー代、駐機場代が掛かっています。所持金を多めに
お持ちください。

「畜生！！」

平和の虚しさを感じたイザークであった。

それはとても面倒くさい体制で（後書き）

イザークのしゃべり方がわかんないよ…。
とりあえずご愁傷様です、イザーク。

ご意見・感想募集中です！

2011 9／12 誤字修正 黒羽 無月様、ありがとうございます
ました。

それはとても受け入れがたい提案で（前書き）

遅くなって申し訳ありません。
弁明はあとがきにて。

それはとても受け入れがたい提案で

結局一度尋ねた警視庁へともう一度足を運ぶことになり、事情を説明してレッカーの罰金を免除してもらったこととなった。

「まあ仕方ないですね。不可抗力ということで裁判でも負けそうですし、不起訴という形で罰金を免除しておきましょう。」

「すまない。正直、払えといわれてもこちらの通貨は持っていないかったからな…。」

「大変ですねえ。…あ、罰金とレッカー代の免除はできますがデュエルの操縦は私有地以外ではできませんから。」

「何！？操縦資格であればこの部隊証に…。」

「いや、独立も認めてない国の部隊証では身分証にもなりませんよ…。それと人型の大型ロボットはわが国では特殊戦闘車両、つまりは大型特殊免許を必要としますからどちらにせよ運転できません。」

「大型特殊車両…。いやいや、どう見てもあれを車両というものには無理があるだろう…！」

「しかし道路交通法ではそう規定していますので…。あと、通信機系統も国内では特別な許可が無い限り使用すると電波法に抵触しますのです。」

「無線もか…。ではそちらから本国に連絡を…。」

「いえいえ、警視庁にそんな権限ありませんから。もちろん、日本国内で搜索願が出されていれば別ですけど…。」

「では外務省にやってもらえばいいだろうが！そのくらい気を利かせろ！」

「うーん、ですがそれも難しいと思いますよ。何せ日本はプラントの国交どころか独立すら認めてませんし…。戦争前にプラントにあった連絡施設は勝手に接收、破壊されちゃってますし…。中立宣言出していますから下手に連合や連邦に頭下げるわけにも行きませんし…。」

「…おい、俺は家に帰れるんだろうな？」

「…あ、国籍法は3年前に変更されて、両親のどちらかが日本人でなくとも国民の権利の一部制限と一部の義務の負担によって永住権が得られるようになっておりまして…」

「おい!？」

翌日

指定されていたホテルで目が覚め、今日の予定を考える。

（今日は…たしかマキシマ首相との会談があったな。）

国交どころか独立すら認められていない国の軍人なわけなのだから、今日の会談如何では強制送還すらされずに、この国で骨を埋めることになってしまうかもしれない。

…日本に永住してしまった自分を想像してみる。

（とりあえず学歴が無いから…大検を取得して、大学に行くか。学部は…法学部、いや、確か権利の制限で参政権と一部の職業選択が無くなっていたな…。となると理工系か…。電子工学系統の学部で、日本のロボット技術に関わるのも確かにありだな…。卒業後は民間企業に入って、プラントと違った終身雇用態勢の会社で会社のためにしっかり働いて、日本美人のきれいな奥さん手に入れて、戦争の危険のない静かな世界で子供を育てる…。

…ありだな。）

……はっ！何を考えているんだ、俺は。

俺はナチュラルに虐げられてきたコーディネイターのために祖国を作ると誓ったんだ。

その決意を忘れて一人だけのうのうとなど…

いやしかし、どうしても帰れないのであればこれも仕方ないのか？

いやいやだが俺は…

ふと、部屋の時計が目に入った。

「な！？」

考え事に時間を取られすぎたようであった。

何とか当初予定していた電車には乗れたものの、なんだか居心地の悪い思いをすることになったイザーク。

今日の彼は、コックピット内にいざというときの備えとして収納されていたザフトの制服を着ている。―（国際法上、捕虜に対する人権規約が適用されるのは制服を着ている軍人に関してのみだから）つまり、あの斬新なデザインの、しかも赤服。

非常に目立っていた。

（…なあ、あれ誰？こんな平日の朝からコスプレ？）

（うわ、それってちょっと残念すぎない？）

（でもあの人、なんか外人っぽいよ）

（今時日本に対してあんな偏見を持ってるっていうのも珍しいよな。

）

…非常に目立っていた。

（…？なぜこちらのことを訝しげに…まあ確かに中立国とはいえ戦争中の国の軍人がいれば不審には思うか。

しかし日本は平和ボケした国だと思っていたが…あの若者たちが着ている統一的なデザインの服。しかも何種類か存在するらしいな…。恐らく一定年齢までの若者に軍務を課しているのだろうな。…先の大戦で大国を相手にして生き残ったことだけはあるということか…。

）

イザークはイザークで何か誤解をしていた。

日本国 首相官邸

「これはこれは、ようこそいらっしやいました。」

「お招きありがとうございます。」

ザフト、クルーゼ隊所属のイザーク・ジュールです。」

「日本国内閣総理大臣の牧島です。：どうぞおかけください。」

「はっ。ありがとうございます。」

「：ふむ、まあまずは今回の件だが、不幸な事故としか言えないでしょうな。まさかわが国の領土の、それもと真ん中に墜落するとはこちらは想定もできませんでしたからな。」

「仰るとおりです。低軌道会戦での戦闘の特性上、重力の影響は考えられてはいましたが、姿勢制御その他の落下修正装置が不能となることは完全に想定外でしたので：。」

ところで、私の扱いは今後どうなるのでしょうか？」

「難しいところですね。：ご存知の通りわが国は今回の一連の戦闘行為に関して中立の立場を採っております。つまり、現在発足している地球連合側の声明も、プラントの独立勢力側の声明も、どちら

か一方だけを受け入れるわけにはいかないのです。

ですので現在わが国は臨時の措置として、開戦前の状況に加えて、プラントにおける現地住民が独立運動を武力を用いて展開しているという解釈をしているのです。

だから、民放などの一部のメディアが使用している『戦争』は誤った表現であり、公式発表では今回の一連の戦闘行為は『紛争』としています。

……ここまではよろしいでしょうか。」

「…まあ、中立国としては妥当な判断かと…。」

「ああ、一つ言っておきますがこれはわが国に限った見解です。中立国全てが同じような解釈にのっとって動いているわけではありません。

…現に、オーブ首長国連邦ではプラントは国家として承認されています。

さて、これらの前提にのっとってイザークさんの立場について説明しなければなりません。まず、国家の体制には『有事』と『平時』が存在します。

平時の際にのみ効果を発揮する法律も存在すれば、有事の際にしか効果を発揮できない法律も存在します。

『捕虜に関する法律』通称『捕虜基本法』も有事法の一つです。なので、イザークさんがいくらザフトの軍人であると主張しても、捕虜として対応することはできません。

捕虜でない人物が不正の日本国内に侵入した場合に適応されるのが『入国管理法』です。ですが、こちらを採用するにしても問題があります。

現在わが国の公式的な見方をすると、プラントは地球連合加盟国各国の合同出資によって作られた旧国際連合の管理地域です。

当然のことながらプラントの居留民は全て地球圏のいずれかの国家の国籍に所属していることとなります。

イザークさんはプラント内でも中々の名族扱いだそうですね？

恐らくご両親は大西洋連邦ないしはユーラシア連邦の国籍なのでしょう。イザークさん自身も開戦前に生まれたのでしょうから、地球連合側に籍が置かれているはずですよ。

入国管理法に則るならば、不法入国者は国籍を保有している国に強制送還しなければならないのですよ。」

「しかし！先ほどあなた方は中立の方針を採っているといっただろう！？」

その対応をとるということはプラントを国家として認めず、地球連合側の意見に賛同するということになるだろう！？」

「そこが難しいところなのですよ。」

私たちは中立的な方針を一貫したい。しかしあなたに対して何らかのアクションをとるとどちらかの意見に賛同することになってしまう。

……いっそわが国に移民という形をとってもらえれば有耶無耶のうちに誤魔化せるのですが。」

「ふざけるな！同胞が命を懸けて祖国を守らんとしているのに平和ボケした国に移民しろだと！？」

所詮は自分の命が可愛いだけの臆病な国家ということか！

先の大戦を生き残ったのは形だけで、中の精神は腐りきっているようだな！この国は。」

それはとても受け入れがたい提案で（後書き）

長くなったので一端切りました。ちなみに後編はまだ書いていません。

遅くなった弁明なのですが、活動報告にも書いたように私のパソコンをぶっ壊してしましまして：先ほどあった連絡では修理費用が97000円。

保証効かないのかよ！？と思いましたが、壊れた、というか壊した原因を考えてみれば仕方のないことでしょうね…。

現在は大学で暇な時間を見つけては大学のパソコンを使ってちょびちょび書いております。

なので更新速度は牛の歩み。

修理が終わったらもう少し早くなる：かと思しますのでご勘弁を。

さてさてイザーク君が日本に落ちはしましたが、皆様の予想を裏切ってシリアスかつ重い経験することになります。

この戦争をある意味最も客観的な立ち位置から見ている日本で、イザーク君はどう成長するのやら。

いえ、電波に進化するわけでは…無きにしも非ずかと思いますが。

ご意見・感想募集中です！

それはとても新たな意見で（前書き）

更新遅れてすみません。

それはとても新たな意見で

フツ―と部屋の空気が冷たくなった気がした。

「……。」

「……。」

双方ともに話さない。

しかしイザークは、この部屋の空気の変化の原因が目の前の人物にあることを感じ取っていた。

「…あなた方が大義だと感じているものを持って戦っているということは知っています。

逆に、地球連合側がそれに対してただ応戦しているだけで、地球連邦はその状態を利用しようとしている。

しかし、日本から見ると、当たり前のようにあなた方がプラントの独立を主張していること自体が理解できません。」

「…なんだと？

理不尽な差別に対して抵抗することは人としての当然の権利ではないか」

「もちろん、あなた方が人である以上抵抗権は存在します。しかし、

あなた方はなぜプラントを我が物顔で占領しているのですか？」

「は…？」

理解できない言葉を聞いた、といった感じの表情で固まるイザーク。

「プラントは、大西洋連邦が主導で、ユーラシア、東アジア、日本、オーブといった国々が共同出資、共同開発して建設されたコロニー群です。

当然のことながら所有権は私たちが保有していますし、そこに住んでいる人々も各国の人間だけに制限していました。

つい最近になり、各国に点在していたコーディネーターがプラントに集住しだしてはいましたが、プラントは紛れもなく私たちによって作られ、管理されていました。

コーディネーターが国家を建設するのだとしても、あなた方がプラントを奪い取る理由にはならないでしょう？」

「し、しかし、プラントはコーディネーターで構成されていた評議会によってもともと自治管理していたのだ。自治政府が独立を宣言したのだから自治団体が国家の母体となるのは当然だろう。」

「それはただ単にプラント内にコーディネーターが集まっていた結

果起こった現象でしょう。そもそも自治政府が独立を宣言する正当性もありません。

あなた方の遠い祖先がかつてプラントに別の国家を作っていたとでもいうのですか？

自治政府自体が本国によって不当な扱いを受けていたのですか？

プラントの国土全体を自治政府が本国から買収でもしたのですか？

最高評議会にしても、もともとはコーディネーターの数が特に多かったわけでもないのに、ナチュラルを経済的に排斥することで無理矢理多数派を作っただけではないですか。

…あなた方がしていることは火事場泥棒とたいして変わらないのですよ。」

「だが、コーディネーターとして民族自決をする権利が我々にも…」

「あるのかもしれませんが、それと他者の所有物を強奪することは関係ありません。」

「……。」

プランと独立の正当性に重大な疑問を持つにいたったイザークではあるが、だからといって今更本国が戦争を終わらせるとも思えないイザークは、何も言えなかった。

ただ、日本がプラント側に立って参戦することはなさそうだと思った。

「……しかしプラントに大義が有ろうと無かろうと、基本的に日本は巨大な戦争に自ら首を突っ込むことはありません。陸軍に限ってみても15万人しかおりませんから、本国の防衛だけで手一杯ですよ。」

マキシマ首相がそう言って微笑むと、部屋の温度はもとの温度に戻ったようであった。

「いえ、こちらでも軽挙な行動をしてしまい…」

「ははは、今さらかしこまったしゃべり方なぞしなくて結構ですよ。」

あなたもずいぶん若いようだが、私も首相としてはかなり若輩者の部類に入ります。ある意味、同じ立場のようなものです。」

「ご、ご謙遜を。」

良くも悪くも、本国でもマキシマ首相の外交手腕は話題となっております。」

「国家の進退も決められぬ愚か者、といったところなのでしょうな…。」

私としても国民2億人を支えている身。人々に気安く死ねなどとは言えないのですよ。」

「2億…。」

「ん？ああ、プラントの人口は確か1200万人ぐらいでしたな。」

「…………。この国は2億人も人口がいながら軍隊が15万人しかないのか？」

「陸軍だけです、それは。海軍に5万人、空軍に3万人、宇宙軍に3万人更にいます。」

それがどうかしましたか？」

「…いや、なんでもない。」

そういえば、今後俺の処遇はどうなるんだ？何とかして国に戻りたいのだが…。」

「こちらの都合で長々と拘束するのはしたくないのですが…。大西洋連邦側とも協議して決めるかもしれないですから、もう少し現状維持をしてもらいます。」

…臨時の特例措置としてイザーク・ジュールさんには準国民としての権限と当座の生活費、それから社会保障費の受給権を与えます。

こちらからの連絡があるまで、指定された場所で生活してください。…詳細についてはこちらの書類にありますから。」

そう言って机の上にいつの間にか置かれていた書類の束を渡す。

「わ、分かった。結構あるな。…ん？おい、この社会保障費って生活保護のことか！？こんなものはいらんぞ！？」

「はっはっは。準国民として就労も可能ですからそれまでの辛抱ですよ。」

「ジュ、ジュール家の人間が生活保護だと！み、認められるかー！！」

……イザークがザフトへ復隊できる日は遠そうだ。

それはとても新たな意見で（後書き）

イザーク…。

おかしいなあ。脳内プロットではイザーク君は2、3日で帰れるはずだったのに…。

ご意見・感想募集中です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988s/>

それはとてもきれいな空で・・・

2011年10月9日19時25分発行